
ネギまの世界にチートが出現！？

目だま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまの世界にチートが出現！？

【Nコード】

N1777N

【作者名】

目だま

【あらすじ】

テンプレな発端から始まった一人の少年のお話。

『紅き翼』に加入し『完全なる世界』を相手取り、麻帆良で教師として魔法世界の崩壊を防ぐ……。そんなテンプレな物語。だが、その物語の行く先はまだ、誰も知らない……。

注意

- ・主人公チート、最強系です。苦手な人はご注意ください。
- ・アンチ要素があるかもしれません。

- ・ヒロイン多数です。
 - ・原作とキャラが壊れる可能性があります。
 - ・旧タイトル「ネギまの世界でチートが原作ブレイク」……
- 気に入っていたんですが原作ブレイクしそうに無いので泣く泣く変更……。

テンプレ的プロローグ（改）だそうだ（前書き）

勢いでやりました。後悔はしてません。

一月二十三日 書き直しました。

テンプレ的プロローグ（改）だそうだ

どうしてこうなった。

今の俺の気持ちを一言で表すならこの表現が一番だと思う。

「うん。悪いんだけどもう一回言って貰えるか？」

今、俺が居るのは上も下も右も左も真っ白な、と言つか色が有るのかすら怪しいどこまでも広がる空間だ。

もちろん、俺は一人で自問自答したり、多重人格でもう一人の俺との会話を妄想する様なイタイ人種では無く、普通のどこにでも居る、それこそ他人の人生からすればモブAと認識されている様な高校生だ。

「何じゃ？もう三回目じゃぞ？いい加減現実を見たらどうじゃ？」

だから、俺の言葉に声が返ってくるのは当然だ。

それが真っ白なローブを着た地面につきそうなほど長い白髪の、神様と名乗る爺さんじゃなければ。

爺さんはまあ、よいか、と呟いて、今、俺がここに居る理由であり、今後の俺にとって間違い無く問題である一言を三度、俺に告げる。

「お主は死んだのじゃよ」

「嘘だっ！！」

「ひぐらしはおるか、うみねこも古いぞ」

なん……だと……！？じゃなくて。

「俺が死んだ？ why？ どうして？」

「お主、実は結構余裕あるじゃろ？」

ジトツとした目でこつちを見てくる神様。

実際は余裕があるんじゃないかってネタにでも走らなきゃやってられないだけだ。と言うか、詳しいな神様。

「うん。悪いけどもう一度言って貰えるかな？」

「仏の顔も三度までじゃ」

「あんた神様だろ！？」

「さて、話を続けるぞ」

うわっ、ザックリ無視しやがった。それで良いのか、神様よ。

「本来、最高神の一柱であるワシが人間であるお主に姿を現すどころか干渉する事はない」

「そうなの？」

と言うか、コイツ最高神の一柱だったのか。こんな爺が……。

「うむ。日本とか作ったのが、ワシとワシの妻じゃ」

「はあっ！？」

物凄く腹の立つドヤ顔で言う爺さん。

日本を作った？それって国産みの事だろ？つまり、コイツってイザナギ？え？まじで？こんなオタク文化に浸かってそうな爺さんが？

「さて、そんなワシが何故、お主の前に姿を現したのかと言うとな、まあ、何と言うか、お主が死んだのはイレギュラーと言うか、有り得ないと事だったと言うか……………」

「…………ハッキリ言ってくれ。そして俺はそんなテンプレは無いと信じている」

さつきとは打って変って口もごりながら言う爺さん。

正直、いやな予感しかない。って言うか、良い予感がした事って無いよね。

「う、うむ。つまり、ワシの部下がちょっとしたミスをやらかしてな？くしゃみをした所為でお主が通る筈は無かった道を通り、鬱陶しい虫を掃^{はら}おうとした手がお主の背を押してしまい……………」

「俺は子供を突き飛ばす形に為り、トラックに撥^はねられ即死、と？」

「……………テ、テヘツ」

片目をつぶり舌を出すと云う、美少女にしか似合わない表情を作る糞爺。だが、その顔は冷や汗で一杯だ。

「ふーん。そうなのか……………」

「む、む？怒つとらんのか？」

俺の淡白な返答に逆に驚いたような顔をする。

俺が怒る？はっ、何を言ってるんだ、この爺さんは。俺は生まれてこの方怒った事の無い平和主義者だぞ？

「そ、そうなのか？」

「ああ。だから今すぐその部下とやらをつれて来い。今なら十万発殴るだけで済ませてやる」

「十分怒つとるでは無いか！！」

「何言つてやがる。人一人殺した代償が全力で百万発殴られるだけだぞ？簡単だろ？」

「桁が増えとる！？と言うか、いくら神でもそんなに殴られれば死ぬわ！！」

「人の命つて人の命でしか償えないものだよな」

「さっきと言つとる事が違いすぎる！！」

ゼエゼエと肩で息をする爺（神だの言うのが面倒になった）。

「で、そんな事言う為だけに来た訳じゃないんだろ？」

飯にもイザナギを名乗るんだ。そのためだけならもっと下っ端、それこそ張本人が来たって良いはずだし。

爺は話が戻った事に安堵の息を漏らしながら、真面目な顔になる。

「うむ。今回のような事も、お主が初めてと言う訳ではない。中に

は暇つぶしだと言って人を殺す者が居るのも事実じゃ」

「……………どこの二次創作だよ。」

「そう言う時の対処として、お主が望むなら別世界に送る事もできる」

「元の世界は？」

無理じゃ、と首を横に振る爺。

何でも、元の世界に送ろうとすれば一度死んだ人間と言う理由で世界その物が殺そうとしてくるらしい。それどこのFATE……………。送る、と言うのがミソで、転生させれば問題無いらしいが、その場合は今の記憶が消えるとの事。よって、今の記憶を持ったまま生きて行く為には別の世界、平行世界ではなく異世界に送らねばいかん、と言う事らしい。

「もちろん、ただ送る訳ではないぞ？行った世界が元の世界に近ければ問題無いが、中には死亡フラグ万歳の世界もある」

神様が死亡フラグとか言ってるじゃねーよ。

「そこで、その者が望む能力を与える事になっておる。せめてもの償いじゃな」

「俺が行く世界ってのは決まってるのか？」

うむ、と頷いて爺は手を横に伸ばすと、どこからか一冊の本が飛んで来る。それは寸分違わず爺の掌に収まり。

「この世界じゃ」

と、その本を俺に見せてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？俺の目は可笑しくなったのか？ああ、これが死んだ影響か・・・。

「爺、俺の目事故でやられてたみたいだ。どこの世界か口で言ってもらえる？」

「む？それはいかんのう。送る前に戻しておこう」

「ああ、頼む。で、どこの世界だ」

「うむ。『魔法先生ネギま！』じゃな」

グシャッ！！

「へブッ！？」

良い顔で言う爺を本気で殴った。

イザナギらしいがそんなことは関係無い。もちろん、後悔も反省もしていない。そんな世界に行っちまったらどこぞの二次創作専用サイトでうpされちまうじゃねーか！

「心配するのはそこなのか・・・・・・・・」

うつせ駄神。テーマは黙ってる。そしてダラダラ流れてる鼻血を止

める。

「さて、ではお主の能力を決めようかの」

数分後、また何処からか飛んで来たティッシュで鼻血を止めた爺が
そう切り出した。

て言うか俺がネギま！に行くのは確定なのか…………。

「……………制限は？」

気分を切り替えて前向きに行こう。向こうに行けば漫画でやってた
戦闘シーンが生の大迫力で見れるんだぞ！？…………でもそれ
って麻帆良祭までやる事ないよな…………。

「掛けなければ為らぬ時はこちらから言う。と言うか、何で能力ま
で貰っておいて一般人目線なんじゃ…………。」

爺は呆れた様な目で俺を見てくる。
放っといてくれ…………。

「じゃあ、曲弦師と音使いのスキルを…………。」

「戦闘する気満々じゃな！！」

内容を説明する前に分かってるって事は知ってるのか、『戯言シリ
ーズ』…………。

解説しておく、曲弦師は目に見えないほどの極細の糸を使い、相

手を捕縛、もしくは切断する技術だ。使いこなせば女の子の細腕でもあら不思議、人体を豆腐の様に切断できると言う優れ物。

音使いは、名の通り音を使うスキルの事だ。これには二種類あって、音を介して相手の肉体を操るか、音その物を衝撃波として使うかに分かれる。この二つは同じ音でも全くの別系統とされていて、両方を操るのは作中でもたった一人しかいなかった。

「と言う訳で音使いは両方お願いします」

「・・・・・・・・まあ、別に構わんが・・・・・・・・」

爺は何とも言いがたい目でこっちを見ているが、気を取り直したのか、ゴホンと咳払いをした。

「他に何かあるかの？」

「『レンタルマギカ』の妖精眼、グラムサイト『SPYREN』の脅威の幻視、メナス ヴイジョンズ『TYPE MOON』の直死の魔眼を合わせた物を」

「それなんてチート!？」

だつて死にたくないし・・・・・・・・。

「あ、スイッチ有りで左目に、色は董色がいい」

「・・・・・・・・細かいのお」

面倒くさいとか爺が呟いてるが無視だ。取り合えず、これだけあれば死ぬ事はないだろうけど・・・・・・・・。

「なあ、アカシックレコードへの接続は有りか？」

「むっ？」

ここ来て爺の顔色が明らかに変わった。顎に手を添えて何かブツブツと呟いている。暫くそれが続き、考え事が終わったのか手を顎から離し、こう言った。

「制限が付く」

「……………だろうな。世界の全て、それこそ世界の始まりから未来ない未来までが記録されていると言われているアカシックレコードへの接続に制限が付かないとは思っていなかった。」

「未来関連の情報、及び個人の記憶やその他諸々の閲覧の禁止。これが制限じゃ」

「ああ、それで構わない」

もともと見たかったのは魔法や魔術、その他の技術についての情報だ。

「俺自身からの希望はこんなもんだけど……………」

「ふむ。ならばサービス、と言う事で不老と肉体年齢の変更を付け足しておこうかのう」

マジか。良いのか？そんな事して。

「今更じゃ。それに肉体のパラメーターや魔力や気はこっちで弄っ

ておこっ」

ありがたい。そこら辺には頭が回ってなかった。

「さて、そろそろ時間じゃ」

「そっか、面倒見てくれてありがとよ」

「うむ、ちゃんと礼を言える若者は素晴らしいな」

うむうむと何度か頷いて。

「あ、そうそう、お主が行くのは原作開始二十年前じゃから」

と言った瞬間、俺の足元に穴が開いた。

「テンプレ過ぎるだろおおおおお！？」

テンプレ的プロローグ（改）だそうだ（後書き）

初めまして、こんにちは目だます。

この小説は他のかたの二次創作を読んで触発されて書いたものです。ネギまそのものを読んだのがかなり前でうる覚えなので間違え等がありましたら、注意して下さい。

オリキャラは主人公以外出すつもりはありません。

感想、ご意見、批評何でも良いので書き込みよろしくお願いします。

入るならやっぱり『紅き翼』だろう（前書き）

改変した理由は、感想をご覧ください。今後、このような誤解を与える事が無い様にしたいと思います。

入るならやっぱり『紅き翼』だろう

「空が青い……………」

目を覚まして、一番に思った事がそれだった。

「まだ明るいから昼なんだろうけど……………」

体を起こして胡座をかき、辺りを見回すが、見えるのは緑の葉を付けた木々だけ。

結論、あの爺、どことも知れない森の中に放り出しやがったな……………!!

「あの爺、次会ったらただじゃ

へブツ!？」

爺に対して恨み言を吐いていると、突如頭の上に何かが落ちてきた。結構重い……………。

「……………これ絶対にあいつからだよな」

落ちてきた物の正体は旅人が使う様な肩掛け式の紐が付いた袋。中には入っていたのは、携帯食料（カロリーメイト二箱）、六甲のおいしい水（五百ミリリットル二本）、救急箱（包帯、消毒液、薬）、ナイフ数本（アーミーナイフなどのゴツいのと投擲用の細いの）、更に黒いコートに曲弦師様と思われる黒い手袋と鋼糸^{ワイヤ}。

それらを出していきながら確認していくと、一番下からどこにでもありそうな封筒が……………。

「金か？」

こっちの通貨だったらいいなー、と嬉々としてその封筒を破くが、中から白い便箋が数枚。
何だ金じゃないのか……………。

「えーっと、手紙？」

嫌な予感しかしないが、読まなければ始まらないんだろうなあ、と若干諦めながらそれに目を通す。

お主がこの手紙を読んでいる頃には、もうネギまの世界に着いておることじゃろう。袋の中にある物についてじゃが
特に説明は要らんはずじゃが、強いて言うならば、そのコートは、ある程度なら形が変えられるから服装に合わせて着ると良いじゃろ。ついでにワシからの加護を付けておるから、強度は歩く教会の数倍はあるぞ。

「完全にチートじゃねえか……………」

気にしては負けじゃぞ？

「思考が読まれてる！？？」

さらにコートの内側に術式を仕込み、別空間に繋がっておる。まあ、倉庫じゃな。便利じゃから使って損はないじゃろ。

「おい、黒いコートに倉庫ってまさか……………」

ぶっちゃけ夜傘じゃがな！！

「やっぱりか！！自重つてもんを知らんのか！？」

散々チート貰っておいで何を言うかと言う感じではあるが、そこは気にしてはいけない。

今はお主がおるのは大戦前の魔法世界じゃから、だから原作開始二十年前程じゃな。『紅き翼』に入るも『完全なる世界』に入るもお主の自由じゃ。

「『完全なる世界』に入って良いのか？」

あ、いや、やっぱり書くのが大変なんで勘弁してれ。

「何だよ、書くのって！！」

次にお主の見た目じゃが今は八歳ぐらいにしてある。そっちの方がおもしろそうじゃからの。

「ちょいちょいムカつくんだけど、こいつ」

ついでに、さつきから感じてた違和感はそれか。

容姿は生きていた頃のものをそのまま使っておるから黒髪に黒目じゃ。まあ、それでも十分じゃろう。能力の使い方は自分で覚える事じゃな。さて、ワシに出来るのはここまでじゃ。第二の生を楽しむんじゃぞ。

親愛なる神

P S ・名前は好きに決めて構わんぞ。

「……………何か手紙読むだけで疲れた。名前は……………後で良いか」

最初の内に出来る限り能力を試しておこう。だとすると、

「楽器が無いから音はまた今度で……………それ以外はいけるか」

まず、袋の中に入っていた手袋と鋼糸ワイヤを取り出し、装着すると、無意識？本能的？取り敢えず、使おうとすればそこまで意識せずに、長年で体に馴染んでいるかの様に問題なく使える事が確認出来た。音使いもこんな感じだろう。

次、アカシックレコード。色々試してる内に念じれば出てきた。尤も、形式がY A H Oだとは思わなかったが……………。ここは普通グー ル先生だろ！！形式美的に！！後、何だよアカシックレコードwikiって。便利だよ？便利だけどさあ！！……………もういいや。これに一々つつこんでいたら限が無いな……………はい、最後に魔眼。これは左眼に神経を集中させれば開いた。だが。

「おお……………！！」

発動した瞬間に視界が引き伸ばされる感覚に足元が覚束無ずにふらつく。そこに僅かではあるが頭痛のダブルパンチ。使いこなすのに

はまだ慣れが必要だろうが、眼その物はいたって良好。『妖精眼』
として俺次第である程度視界の拡大縮小出来るのも確認。『直死の
魔眼』による死の線と点も、一度死んだ影響か、はつきり視えてい
る。

ここまでは良いが『脅威の幻視』は確かめ様が……………。

「うん？あれって……………」

ここからそう離れてない位置から立ち上る靄……………間違いな
く脅威だ。靄が立ち上っている中心点を探ろうとするが、その時、
左眼に鋭い痛みが走る。

眼に痛みが走るって言う事は、つまり……………。

「あそこで魔法が使われている……………」

原作開始二十年前、更には離れた位置からでも見えるほどの脅威。
これらから考えるに、十中八九あそこはヘラス帝国と連合の戦場にな
っている。

魔眼も大分馴染んできてるし、これはもう、行くしかない……………
……………！！

俺は意気揚々と袋を肩に掛け、靄が立ち上る方へ向け歩き出した
。

「スゲエ……………」

辿り着いたそこは、戦場とは思えないほど煌びやかだった。

軍艦から放たれる精霊砲、魔法の矢による弾幕、その間で鬼神兵を狙う中級魔法や上級魔法。まるでゲームや映画を見ているかのような光景だ。だが、俺の頬を撫でる戦場の余波によって生まれた風がこの光景が現実だと言う事を証明している。

気付けばもう戦場で使われている魔法を徹底的に魔眼で解析^みしていた。いきなり使いすぎた所為で頭が痛い^が、それでも後悔していない！！

と、それは置いてといて、戦場の魔法を粗方見て、一つ思った事がある。

「魔方阵が一つ一つ違う・・・・・・・・？」

勿論、魔法はそれ毎によつて術式が変わるが、同じ魔法でも術者によつて結構違う。多分、あれが魔法の上手い下手に繋がっているんだろう。放たれる魔法の威力も違っているし。

どうも、術式や魔方阵は術者の感覚で作っているらしい。媒体はその補助つて所か？で、詠唱は感覚で漠然と捕らえている魔方阵や術式への明確な意味付け、と・・・・・・・・。もしかして、術式や魔方阵をしっかりと理解して把握しておけば詠唱も魔法媒体も要らないんじゃないか？

「どの道、今は使えないか・・・・・・・・」

教本でもあれば良いんだが、今戦場で放たれている魔法で手本になりそうな術式は無い。

「まあ、取り敢えずは傍観だな」

え？アカシックレコードで調べて魔系で曲弦師ジグザグで両軍壊滅させる？
いや、しないから。アレは神様がんきゅうのご乱心だろ。少しは成長したんじゃないか？と、そんな事を思いながら色とりどりの弾幕を魔眼に慣れるついでに眺めていた。…………撃ってるのは少女じゃないけどな。

オッス、俺は『紅き翼』のリーダーのサウンドマスター、ナギ・スプリングフィールドだ。今は仲間と連合の指示で戦場に向かっている真っ最中だぜっ！！

「今回こそおもしれえ奴がいると良いんだけどな……………」

「フフフ、あなたと渡り合えるような人はなかないませんよ」

俺の呟きに胡散臭い笑顔で返すのは白いローブを着たアルビレオ・イマツて奴だ。仲間からの愛称はアル。はつきり言ってこいつは変態だ。良い奴なんだけどな…………。

「むしろ皆無と言っていいじゃろうな」

アルにそう返すのはジジイ言葉で話す白髪のカキ。名前はフィリウス・ゼクト見た目は俺よりも幼いが、不老で俺等なんかよりもずっと長く生きていたらしい。俺の魔法のお師匠でもあるんだが、未だ

にアンチヨコ見ながら呪文を唱えてる俺を若干諦めているらしい。
ふん！魔法なんか発動さえすれば良いんだよ！！

「おい、そろそろだぞ。 気を引き締めろ」

俺達の緩んだ空気を気にして声を掛けたのはメガネを掛けたアジア系の男で青山詠春。ニッポンのカタナつっ—剣を持っていて、キョートのシンメリーユとか言う流派の使い手でこの戦争には腕試しに来たサムライらしい。

「分かってるよ、詠春。 よしつ、行くぞ野郎共ッ！！」

俺の掛け声を合図に、俺達『紅き翼』は戦場突っ込んだ。

ズドン

ッ！！

「おう？」

突如、とんでもない威力の雷が帝国側の鬼神兵を兵士毎消し飛ばした。凄まじいまでの熱量と光、爆音が戦場に吹き荒れる。
確かに凄まじいまでの威力だ。だが、魔眼越しに視ていた俺が驚いたのはそこじゃない。俺が驚いたのはその術式の杜撰さずさんと定められ

た魔力だ。

雷が飛んできた方向に視界をずらすと、そこにはもう呆れる程の魔力が一つ、それほどではないが戦場にいる奴らよりも大きい魔力が二つ、さらに魔力が殆ど無いのが一つ。だが、そのどれもがこの戦場その物よりも巨大な靄

^{メナス}脅威を放っている。

間違いない・・・『紅き翼』だ・・・!!

と言う事は、さっきの雷はナギの『千の雷』か・・・。原作通りの魔力バカだな。いや、そもそも一人だけでもこの戦場より大きい脅威^{メナス}なのにそれが四つとか・・・オーバーキル以外の何者でもないだろ。

「あーあ、なんつー速さだよ・・・」

正しく速攻。『紅き翼』が入ってきてから戦場の粗方が片付くまで僅か三十分。呆れる様な強さだ。だが、その三十分間、俺がひたすら視ていたのはある人物の魔法。

術式の熟練度も機能性も、戦場にいる誰よりも優れている。機能美と言うか何と言うか、人工的な美しさの様な物を感じる。頭のいい奴は数式を美しいと言っらしいが、今ならそれが分かってしまう。

「フィリウス・ゼクト・・・」

思わず視惚れてしまった。アレほどの術式を操る人間は他にいないだろう。と言う事で。

「弟子にしてください!!」

『はあ．．．．．？』

数分後、白髪の少年に黒髪の少年が頭を下げ、周りにいる『紅き翼』のメンバーがポカンとした表情でいるのが見られたとか。

バグキャラ登場だそうだ

『紅き翼』に入って一ヶ月。更に言えば俺がゼクトの弟子になってからも一ヶ月。そして、俺の本名が夜野空よるのそらに決定してからも一ヶ月。名前が安直とか言うコメントは無視で。凝りまくって厨二なDQNネーム付けるよりはよっぽどマシだろう。

「で、空はどうでした？」

俺の隣に座るゼクトにアル

本人がそう呼べと言った

が、話し掛けてくる。

あの後、流石と言うか、何と言うか………、最初は驚いていたものの『紅き翼』はあっさり俺を受け入れた。

詠春も何だかんだ言っではいたが、積極的に反対しようとはしなかったし………。

転生云々についてと能力の事を話すとナギは、つえー奴が増えた！と大喜び、他三人は、へー、と驚いていたが、それだけだった。むしろこっちが拍子抜けしたぐらい淡泊だった。で、単刀直入に理由を聞けば、三人とも口をそろえて。

『ナギがいるから大抵のトンデモには慣れた』

と言いつつ。

ナギ、転生並みのトンデモって、何したんだよ………。

「うむ、中々じゃったな。いくら魔法球を使ったとは言え、僅か一ヶ月で免許皆伝になるとはワシも予想外じゃった。貰い物とは言え、眼も良いし、魔力もあり、才能もある。それに

」

ゼクトは一度言葉を切り、視線をナギの方へ向ける。

「頭も悪くないしの」

それを聞いてクスクスと笑うアル。すぐに笑うのを止めない所を見るとツボに入ったらしい。

ゼクトさんとの授業 修行と言うよりこっちの方が合ってる気がする は、まずゼクトさんが魔法を使い、俺がその術式を眼で視て、兎に角覚える。そして、実践し、悪い所をゼクトが指摘すると言っ形だ。

この世界の魔法は、俺の推測通り、魔法媒体を介して術式を発動させ、そこに流した魔力で周囲の精霊に呼びかけ、詠唱で魔法のイメージを補強し、精霊の力を借り発動させると言う形式をとっている。詠唱を使うのは、基本的に魔法使いが術式を感覚で処理しているからだ。無詠唱は、それが熟練した証だと言ってもいい。

だが、術式を視覚化出来るおかげで俺には詠唱は必要が無いと言う事が判明。魔法媒体は必要だったけど………。

最初に調べた俺の属性の適正は、一応全属性使えるが、最も相性が良いのは、闇、雷、炎、氷の四つ。

更に、最初から変わった事と言えば、顔を包帯でグルグル巻きにしたことぐらいだ。イメージはる剣の志々雄か、めだか箱の名瀬さん。俺の本名、素顔、素性は今のところ『紅き翼』しか知らない。

ぶっちゃけ将来こっちの方が好き勝手できそうだからっていう理由だけど………。

ゼクトさんからは一応、及第点を貰い授業は終了。

最近やってる事と言えば既存の術式を弄くってみたり、オリジナルの魔法創ってみたり、魔法球改造して中に引き籠ってゼクトさんとひたすら研究に没頭したり………後はアカシックレコードから別系統の魔術の知識引張って来て魔導書書いたり、効率的な体の鍛え方や格闘技の技を検索して戦えるようにしたり、とこれぐら

いかな？

さて、近状報告終わり。次に現状報告。

「んっふっふ」。こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ」

はい、みんなの予想通り鍋の真っ最中。さっきのゼクトさんの言葉はナギには聞こえなかったみたいで鍋にはしゃいでいる。

「あつ、ナギ、おまつ、何肉を先に入れてるんだよ!!」

「トカゲ肉でも旨いのかのう?」

勝手に具材　肉をどんどん入れていくナギを詠春が止めようとするが、全く気にしていない。さらに、そこにゼクトさんのどこかズレた疑問に首を傾げる。

「いや、トカゲとドラゴン一緒にするのは……………」

「いいじゃねえか、ノアも詠春も細かいことはどうでもよ」

「まあ、確かに食えりゃ良いけどね」

あ、ノアってのは俺の事ね。未知のアンノウンをもじってノア。顔隠してからそう呼んでもらってる。

「バツ、バカ!? 火の通る時間差と言うものがあってだな!!」

向こうにもいたな、こう言う奴。確か……………、

「フフ…………詠春知っていますよ。日本では貴方のような者を」

鍋將軍』……と呼び習わすそうですね」

「いや、奉行じゃないか？」

ドヤ顔で言うアルに俺がツツコミを入れる。

全く、適当に教えるなよアル。「つ・強そうじゃな」ってゼクトさん信じないでくださいよ！？」

「わかったよ……詠春、俺の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」

「全て任す。好きにするが良い」

そう言われて、んー、嬉しくないなーと釈然としない顔でぼやく詠春。そして、その隙に煮えた肉や野菜を掠め取る俺。

『おいっ！！』

「詠春が鍋將軍なら俺は鍋レオンだ！！」

『なん……だと……！！？』

その後もワイワイガヤガヤと皆で鍋を突く。

「おお、何じゃこのソース。うまいぞ？」

「ホントだ！うめえっ！？」

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ」

「それに大根おろしですね」

「あー、何か久々に食った気がする………」

「これがしょうゆか！！スゲエうめえっ！！」

「ナギ、お前は日本に来た時寿司食ったろ」

約一ヶ月ぶりの日本の味を、仲間と堪能する。

この世界に来る前は何気なく食べていたけど、今じゃ日本の料理は滅多に食べられないからな……と、俺が珍しく感傷に浸っているときに、ナギが箸を咥えながら。

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

と、感想を漏らした。

「姫子ちゃん……って誰？」

一応、知ってはいるが、直接の面識は無いため隣に座るゼクトさんに聞いてみる。

「オスティアの姫御子の事じゃよ」

「ああ、黄昏の………」

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会が掴めるやも……です」

アルはそう言っているが、実際にはかなり厳しいだろうし、アルもそれは分かっているんだろう。

尤も、この『紅き翼』のメンバーは、そんな事気にせず、一切関係なく、姫御子 アスナ姫を助けてしまっただろうけど……

「その戦だが……やはりどうにも不自然に思えてならん」

詠春がシイタケを口に運びながら、今回の戦争の核心とも言える事を口にする。

「……どうしよう。もう『完全なる世界』の事ばらしてしまおうか……」

「何が？」

俺が内心で悩んでいても、会話は続いていく。

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、鳥頭。肉ばっか喰うな」

そう言えば、前にもナギが言ってたな。その時にも同じ様に悩んだが……やっぱりナギの鳥頭は正しいかも……おツ？

ドガッ！！

突如として飛来した大剣が俺達を中心 まだ中身が残っていた鍋を派手にひっくり返した。俺達はそれを素早く察知、反応が遅れた詠春以外の全員が既に立ち上がりひっくり返り空中に投げ出された鍋の具から正確に肉だけ取っていた。勿論、俺も確りと取った。むしろ俺はそれ以外の具も取った。野菜は体にいいんだよ。

「食事中失礼~~~~ッ！！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！ittyちやろうぜッ！！」

その直後に響くバカのような大声。その声のする方に目を向けると、そこには右手にまたも大剣を持った筋肉達磨。来たよ、バグの代名詞が。失礼だと思っならするなよ。まだ食べたのに……先に鍋を庇うべきだったか？

「何じゃ？あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな。えいしゅ……………むお！？」

ナギの変な声で詠春の方を見てみると、そこには頭から鍋を被り、手には先が折れてぶら下がった箸を持つ詠春が……………。

「うわぁ……………」

実際に見るとひどいな、この絵……………。

「フ…………フフフ…………フ…………食べ物に粗末にする者は

」

そこまで言つて、詠春の姿がブレた。

「
斬る」

あのラカンでも反応しきれないほどの速さで斬りかかった詠春は、その一太刀目でラカンの持つ大剣を切り裂き、その返す太刀でその下の岩の崖ごと両断するが、ラカンも半ばで斬りさかれた大剣で防ぎ切っている。

「次、俺行くから」

「何言つてやがる。俺が行くに決まってる！」

俺の言葉に予想通り、ナギが突っ掛かって来る。

この戦闘狂が………。

「ナギ、お前には戦闘経験が少ない後輩の僅かな経験も摘み取ろうとするのか？」

「………仕方ねーな。でも、俺の分は残しとけよ」

「はいはい」

渋々、と言った感じで引き下がるナギになおざりに返事をして、あの爺から貰ったコート 通称『黒の聖域』を羽織る。

勿論、ナギに言った言葉に嘘はない。『紅き翼』として活動しているため、戦闘経験は勿論、人を殺すのすら経験済みだ。だが、相手はどれも十把一絡げの雑魚ばかり。修行も研究も怠ったことは無いが、あのレベルの奴にはどれくらい通じるか試してみたかったのだ。ついでに、折角の鍋を邪魔したバカにお仕置きを、な。………。本当についでだぞ？ 久々の鍋なんだからもうちよつと食いたかったとか思っただけ？ 本当だからな！！

ラカンによって喚び出された扇情的な姿をした精霊達に詠春が呆気なく気絶させられたのと同時に、雷の暴風をラカン目掛けて放つ。

「おう、出たな。情報その5、包帯のガキ、弱点不明。特徴情報無し」

「それ情報って言えるのか？」

情報と言えるかどうか、かなり怪しい情報を言うラカンに率直に思った事を言ってみる。

「仕方ねえだろ。お前のはぜんぜん無かったんだよ」

まあ、俺が『紅き翼』に加入してから余り時間が経ってない上に、意図的に素性を隠しているんだから当然か。

「こつちも仕事なんでな、ガキだろうと容赦しねえぞ」

「…………いや、確かに八歳のまま体を変化させてない俺も悪いんだけどね？こつやって面と向かってガキ扱い、しかも格下扱いされるとムカつく訳で。」

「オッサン、泣いても許さねえからな」

つまり全力全壊。魔力、気、殺気解放。

普段はデカすぎて抑えてるんだけど、コイツ相手ナライイヨネ？

「ちよつ、おまえ何もんだ！？有り得ねえぞ、それは！？」

「問答無用！！」

見た目に合わない力の大きさにラカンが慌てるが、そんなの知った事か。

連続瞬動でラカンの死角と視界を交互に移動しながらナイフで斬りつける。狙いは全て急所。眉間、目、首筋、心臓を絶え間無く攻め立てる。

態勢が悪いと見たのか、ラカンは舌打ちして後退しようとするが、そこを狙い打撃つ。魔法媒体　ゼクトさんから貰った指輪型を介して術式を発動させる。

話は変わるが、魔法の射手を見ていて前々から思っていた事がある。雷や光の矢、遅すぎないか………と。

確かに溜めや誘導は使えるかもしれないが、その所為で利点を潰している様な気がする。そこで、魔法の射手の術式を弄り、溜めや誘導　平たく言えば、細かい制御を放棄した速射。すなわち。

「『魔法の射手・速射連弾・雷の109矢』」

方向性を持った雷。

まあ、俺は雷系統の魔法には全て同じ様に手を加えているから、それこそ、違いは威力と規模ぐらいだけだな。

さすがのラカンでも、初見で、しかも百を超える雷はかわし切れなかったのか、雷の光に飲み込まれていった。

だが、俺は知っている。アレは本当にバグだ、と。百九の雷に撃たれた程度でアレが倒れるものか。それに、他に試してみたい術式もあるし………と、次に何を試そうかと考えながらも、魔法の射手によって土埃が立っている場所を油断無く見据える。

「ラカン・インツ……パクト!!」

その土埃の中から、異常なまでの密度を持つ気の閃光が空間を貫く。直前に気の高まりを感じていた俺は既に瞬動で安全域まで先んじて移動していたが、それでも背筋が寒くなる威力だ。

「やっぱり、デカイのはあたらねーか……」

土埃の晴れたそこには、幾分か服がボロボロになってはいるが、ラカン自身へのダメージはそこまで無いらしい。

雷に撃たれるだけで普通なら死に掛けるよな……？

予想はしていたが、実際に目の当たりにすると口元が引き攣ってしまふ。

「エグイ攻撃するじゃねーか、ガキ。普通、魔法の射手の制御無くそうなんて思わねーぞ？」

「いや、それを受けてほぼ無傷なオッサンもおかしいだろ……」

「それは気合だ、気合」

本当に気合だけでどうにかするのか、このオッサン……。

「まあ、無事ならもう少しだけ、付き合ってもらう、ぞ!!」

「ヘッ、かかって来いよ!!」

拳を握り、構えを取るラカンに対して俺は真っ向から突っ込んだ。気が練りこまれた拳が地を抉り、魔力が付加されたナイフが空を切

る。どつしりと構えその場から動く事無く、力を溜めて一発一発拳を振るうラカンと短い距離を瞬動で動き続け、高速でナイフを振る続ける俺。

格闘だけで何処まで通用するのか、試してみたかったのだが……・今は兎も角、このまま続ければ間違いなく押し切られる。

ナイフは殆ど紙一重でかわされ、斬れたととしてもナイフじゃ致命傷にはなりえないが、ラカンの一発は『黒の聖域』の上からでも、恐らくはダメージが入るだろう。速さでは俺に分があるが、ラカンも遅い訳ではない。一発でももらえば、その後連打されてお仕舞いだろう。

「なら……………!!」

瞬動で正面からラカンの背後に回りこみ、そのまま駆け抜けた。

「おっ？」

予想外の行動にか、それとも展開を読み取った事に対してか、ラカンが驚きの声を上げる。その声を背に、瞬動で移動している最中から、最近作り上げた術式を展開させ、魔力を流し込む。

「『煉獄』!!」

これを作った時は徹夜明けだった所為か、自重という物が全くされていない。その分、術式も細かい上に規模がデカく、発動させ難いが、消費魔力は『燃える天空』と同量程度。ゼクトさんにも頭がおかしいと言われた様な魔法だ。

俺の持つ火系統系最大の規模と威力を誇る魔法が発動した手応えを感じた瞬間。

空間を、白い光が支配した。

その直後に感じる膨大な熱と衝撃、爆音。
あれ……………？おかしいな……………。

以前、別荘で試した時は精々『燃える天空』の倍程度の白い炎だったのに……………。もしかして、加減間違えた……………？

「……………って、おい！オッサン、生きてるか！？」

ヤッベー、こんなところで加減間違えて原作で主要なキャラ殺してしまいました、って洒落になってねーよ！！原作ブレイクは望む所だけど、こんな必要のない原作ブレイクはいらねーんだよ！！
と、焦って辺りを見渡すが……………。

「ええー……………」

周りの森が一面の焦土になっていた。俺とラカンが戦っていた筈の崖すら吹き飛んでしまっている。

いや、これはねーよ。ヤバイ、物凄く不安になってきた。ホントに死んでないよな……………？

「む……………ぬう……………」

崖……………だった場所から少し離れた所に、ほぼ全裸のラカンがぶっ倒れて呻き声を上げていた。

そしてそれを見て、俺もぶっ倒れた。……………主に精神的なダメージで。

死に掛け所か、半分ほど天に召されかけている気がする精神でパパっと状態を見る限り、火傷や切り傷はあるが……………どうやら吹き飛ばされた衝撃で気絶しただけの様だ。

「…………アレを直で食らって、これだけの傷ってどう言う事だよ……………」

何か釈然としない。

取り敢えず、命に関わる様な傷はなさそうなラカンを放置して、『紅き翼』の元へと戻ると、戻った途端、全員に頭を引叩かれた。アルやゼクトさんが結界を張ったからよかったものの、結構際どかったらしく、ゼクトさんが「今度からは魔法を使った戦闘訓練を仕込まねばいかんのじゃ」と言う事で、今度は本格的な修行をやる事に…………。

実は、これと同等の自重していない魔法がいくつかあるが、内緒にしよう…………。

『グレードⅡブリッジ奪還作戦』だそうだ

数ヶ月後、ジャック ラカンの事。そう呼べと言っていた

がいつの間にか仲間になっていた。

自然に仲間になってたからビックリ。ある意味凄い。

「で、今回は俺も参加するの？」

今まではアルギユレーに追いやられていたのだが最近では戦況が厳しくなってきたのか、とうとう『紅き翼』を前線に投入する様になって来た。当然、俺もそれに伴い前線に入っている訳だけど、今まで、表立った戦線に入った事は無い。

と言うか戦線は俺が抜けても問題無い為、他のメンバーには一寸ばかり向いていない仕事をやってたりする。内容は割愛するが、簡単に言うならば、政治つて、黒いよなあ……………。

おかげで気配を消すとか隠れるとか、ついでに情報収集なんか得意になってしまった。まあ、今の段階で既に『完全なる世界』の情報も集まり始めているから、『紅き翼』としてはありがたいのだが……………。

「ええ。『グレードⅡブリッジ奪還作戦』では今まで以上の激戦となりますので、あなたにも参加して欲しいらしいです」

そして現在、俺は『紅き翼』に割り当てられた宿泊施設の部屋を訪ねてきたアルに、簡潔に今度の作戦についての説明を聞いていた。

「まっ、必要だつて言うなら参加するよ。細かい所は決まってるのか？」

備え付けのベッドでひっくり返ったまま、椅子に座り紅茶を飲んでいるアルにそう聞き返す。

いや、さっきまで仕事で疲れてたんだよ、俺は……………。

「いいえ。私達にへの指令は『好きにやってくれ……………』です。細かい作戦を決めても、守らない人がいますので」

そう言っつていつもの様に胡散臭い笑みを浮かべるアルに苦笑が出る。まあ、ナギとジャックのバカコンビはある意味有名だからなあ……………作戦無視する癖に戦績を上げるバランスプレイヤーって。正確に言えば『紅き翼』自体が、だけど。

「で、それだけを言う為だけに来たんじゃないんだろ？」

「……………そうですね。それなら、話が早いですね」

そう言っつと、アルは笑みを引っ込めて珍しく真面目な表情で言う。

「あなたは、最近何をしているんですか？」

「へ……………？」

予想外の問い掛けに、思わず間抜けな声を出してしまう。こんな事を聞かれるとは微塵も……………は言い過ぎだが、思っっていなかった。

そもそも、俺が作戦に参加するつて言う事を伝えるだけなら念話でもいいのになー、なんて思ったから聞いてみただけなのに、何このシリアス（微）空間。いやいや、勘弁してよ。俺には精々シリアル（笑）ぐらいがお似合いだと思ってるんだから。

「あなたが度々どこかに出かけているのは知っています。それがメ
セ^{うえ}ンブリーナ連合から与えられた任務だと言う事も……」

まあ、隠してなかったからな。普通に、行つてきまーす、とか言っ
てたし、二、三日留守にする事も多かつたし。

「ですが、連合も一枚岩ではありません。……大丈夫なん
ですか？」

「大丈夫だよ。内容は言えないけど、『紅き翼』に被害が出るこ
とはないから」

俺がそう言つと、アルは呆れた様な顔をして、盛大に溜め息を吐き、
ヤレヤレと言う様に肩を竦めた。

「何だよ」

何と言つか、アルのそう言う態度は見ていてムカつく。様になつて
いる分余計に……

体を起こし、アルを睨んでみるが、アルはどこ吹く風とばかりにケ
ロリとしている。

「私が心配しているのは、あなた自身の事ですよ？」

また、一寸ばかり予想外の言葉に、きょとんとした顔をしてしまう
が、すぐにニヤリと笑い掛ける。

「……それは、『紅き翼』に被害が出る以上に、心配しな
くていい問題だぞ？」

ま、明日は見てな、と言つて、またベッドで引つ繰り返る俺を見て、アルはいつもの様に胡散臭い笑みを
いや、胡散臭いだ
けじゃなく、微笑ましい者を見る様な笑みを浮かべた。
……取り敢えず、その笑顔は腹が立つから引つ込めろ。

「おや、これは失敬。では、私はこれで。それと、仕事で何かあったら相談してくださいね。私達は、仲間なんですから」

そう言つて、アルは部屋から出て行つた。

「仲間、か……信頼されてるなら、その信頼には応えなきゃな」

取り敢えず、今日はもう寝よう。作戦は明日の夜だし……もう眠い……。

翌日の夜、『グレードIIブリッジ奪還作戦』開始。

今回の作戦で俺達『紅き翼』へは直接的な指示は殆どされていない。その上、独立して動く権利まで貰っている。要するに、好きな様に暴れろつて事だ。まあ、今回の作戦の司令官からは「お願いだから、味方には被害を出さないでくれ……!!」と、泣き付かれたのは驚いたが……。

どうも、今までの作戦でも、死者はいなかったが、軽症者は結構い

たらしい。そりや有名にもなるさ……。

で、その『紅き翼』の俺を除くメンバーは連合の尖兵として、既に戦闘を開始している。そんな中、またもや単独行動をしている俺はと言つと。

「ん、ん？ああ、こうか……よし、成功」

え？何をやっているかって？グレートブリッジの障壁に穴開けるんだよ、侵入する為にな。

巨大要塞であるグレードブリッジには、当然、周囲に要塞を覆う障壁が常時展開されている。

動力源は要塞その物蓄えられている魔力、出力やその他の制御も全て、要塞の電子精霊が受け持っているため、非常に使い勝手が良い。最大出力では、ナギの『千の雷』を防ぐそうだ。電子精霊も優秀。

この障壁を突破するには、いくら『紅き翼』でも時間が掛かる。

そこで、俺の出番だ。俺の目的は、要塞内に侵入し、障壁をどうにかする事。

で、わざわざ障壁に穴を開けている理由だが、魔眼を持っている俺が、いくら優秀だとは言っても、電子精霊如きに魔法の扱いに負ける訳が無い……。のだが、さすがに三百キロもある障壁を全て無効化するのは面倒だ。

いつその事、殺してしまってもいいのだが、それをすると、今後、もう一度設定しなおさなければなくなり、同じく面倒……。

・なので、術式に干渉し、一部だけに穴を開けるなんて言うハッキング染みた真似をしていたのだ。

で、ついさっき、見事障壁内に侵入。後は中で好きに暴れるついでに障壁を消すだけだ。と言う事で、グレードブリッジの裏手から外壁に立ち、一メートルほどの魔法陣を展開。

「『おわるせかい』」

本来ならば、百五十フィート四方に絶対零度の空間を作り上げる魔法だが、俺の『おわるせかい』は規模を弄り、魔方陣を展開した場所のみに絶対零度を発生させる。つまり、凍った外壁が砕け、ポツカリと、中まで続く一メートルほどの穴が開く。

「よっ…….と」

穴へ飛び込み、飛行術で一定の速度を維持しながら、降下する。

何か、気分的にはカルくんだな、ゆっくり降りていく感じとか…….と、着いたか。

暗い闇の中から、明るい空間へ出る。グレートブリッジの内部は、要塞と言う構造上、幾つもの区画ブロックに分かれている。俺が出た空間も当然そのうちの一つ。下では帝国の兵が忙しく動き回り、戦闘準備を整えている真つ最中らしい。まあ、だからと言って遠慮も容赦もしないんだけど…….

天井に糸を張り巡らせ、それに足を引つ掛ける形で、逆様にぶら下がり、俺の足元に中心となる魔法陣が、そして、区画ブロックの壁一面にも魔法陣が張り巡らされる。

この段階になつてようやく俺の存在に気付いたのか、下では帝国の兵達が焦つて杖を構えているが、もう遅い。

「『コキユートス
永久凍土』」

発動させる魔法の名を唱えながら、陣に魔力を流し間、世界が止まった。

瞬

もちろん、世界が止まった、なんて言う事実はない。正確に言えば、この区画ブロックで、動いているのは俺だけになったと言うだけ。

俺が徹夜明けの可笑しなテンションで、全く自重せずに作った魔法、『コキユートス 永久凍土』。以前、ジャックにぶつ放した『煉獄』と同じシリ

ズ。実は後二つほどあったりするのだが、それはまた今度。

『永久凍土^{コキユートス}』は、同じ氷属性でも、さっき使った『おわるせかい』より、半永久的に対象を氷の柱に閉じ込める『こおるせかい』に近い。と言つか、規模が少しばかり違うだけだ。

『永久凍土^{コキユートス}』はその名の通り、術式が展開された空間の気温を最大で絶対零度まで、下げ続ける。俺が死ぬか、解除するかしないと、その空間は永久に極寒の地獄だ。詰まる所、今、俺がいる区画^{ブロック}にいた、俺以外の全員がついさっきまでの体勢で、凍り付いている。『こおるせかい』の様な対象を生かして閉じ込めるのではなく、この場にいた全員が凍死。

えげつなさじゃ、『煉獄』に勝っているんじゃないかと思う。アレは、ゼクトさんクラスの障壁で防ぐ事も可能だが、コレは、気温そのものに干渉している所為で防御はほぼ不可能。俺でも『黒の聖域』着て、この術式用の耐寒術式の使わなきゃ危ない。

だが、これで陽動には十分だろう。魔力も少なからず消費するし、とつとと解除しよ……。

だが、この区画^{ブロック}の異状は必ず要塞中に伝わり、混乱を齎^{もたら}す。障壁には突破された痕跡も、術式を弄られた痕跡も残ってはいないし、残す様なへまはしない。そして、混乱すればするほど、俺は中で動きやすくなる。障壁を消すにしても、戦うにしても……。

「取り敢えず、電気系統から弄りに行くか……………」

そう言って、俺は影へとその体を消していった。

「フツ

！！」

予定通り、電気系統を落とし障壁を消した後、俺は闇に包まれた要塞の中を縦横無尽に駆け回っていた。

ブロック

区画の天井へ糸を張り巡らせ、そこを足場に、虚空瞬動による高速移動に方向転換を加え、両の手に携えたククリナイフを、相手との通り過ぎざまに振るい、『死』を切り裂いていく。俺のステータスは、それこそ速さに特化し、ナギやジャックでも反応できない所まで来ている。そんな俺の瞬動に加えて、暗闇の中と言う事もあり、相手は全く俺の姿を目視できていない。左目から漏れる董色の光が尾を引き、それを相手が見た時には既に死んでいる。

帝国の兵は、その殆どがパニックへと陥った。障壁が消えた事により、外の相手にも応戦せねばならず、しかも内部には目視できないが、はつきりと敵がいる。そんな状況の中で、当然逃げ出す兵もいたのだが、そいつらは見逃した。

これは殲滅戦ではなく、奪還戦だ。そこまで殺しに躍起になる必要はないだろう。

「『煉獄』……………！！」

途中で仕掛けておいた術式に魔力を送り発動、内部の破壊活動を進める。……………これ、俺がテロリストとかになったら物凄く活躍しそうな気が……………。

『おい、何なんだ相手は！！』『と言うか、何人いるんだよ！！』
『さつき魔法が斬られたんだけど！？』『俺は魔法自体が発動しなかったぞ！？』『フハハハッ、俺は人間をやめるぞーーーーー！！』
『ヒヤッハー、汚物は消毒だー！！』

．．．．．何と云うか、あいつら、まだ余裕があるのか．．．．．
．？何か変な奴もいるけど．．．．．。

相手の叫びを聞きながらも、魔法その物や、攻撃の軌道を先に示す脅威^{メナス}を殺し、無効化していく。

ここから先の展開は一方的な物だ。中は俺の所為でガタガタ、もうじき、外も終わるだろう。つまり、これで詰みだ。

そして、大番狂わせも無いまま、『グレードⅡブリッジ奪還作戦』は俺達メセンブリーナ連合の勝利に終わった。

女王サマ登場だそうだ（前書き）

大変遅くなりました！！待っていたいていた方すみません！！え
？待ってない？なん・・・だと・・・！？

女王サマ登場だそうだ

『グレードIIブリッジ奪還作戦』に参加して暫く。

それに参加した事により帝国からは『紫の瞳の死神』『暗黙の天災』

『魔法殺し』、連合からは『正体不明の英雄』などの二つ名を付けられる事になってしまった……鬱だ、殺^やろう。

最近、そこはかたなく思考回路が物騒になってきた様な気がしないでもないが、それはまあ、置いておいて、表舞台に出たのは一回しかないのに、何でこんなに付くかな。ナギだって有名なのは二つ程度なのに……。しかも、俺の場合はこれ全部がイコールで俺に繋がるし。最後のはきつとこの世界のFATE厨が付けたんだと思う。いい酒が飲めそうだ。

さて、今は原作で言えば第二十五巻百四十六ページ、ガトウ達が仲間になった後、ナギ達が『完全なる世界』について初めて知るところ辺りだろう。だろう、なんて曖昧な語尾なのは、現在その場に俺がいないからだ。

じゃあ、俺が何をしてるかと言えば。

「や、止める……。止めてくれ……………」

ぶっちゃけ、現在進行形で任務の真っ最中です。いつもの如く真っ黒な奴を。

今回の任務は、帝国に武器を横流ししていた裏切り者の処分

と言うのが俺に言い渡された表向きの内容。

実際には、上の奴らに責任押しつけられて邪魔になった下っ端の片付け。はつきり言つて蜥蜴の尻尾切りだ。当然、どっちも『完全なる世界』と繋がりを持ってる、俺からすれば歴とした裏切り者。それでもって、今の俺に命乞いをしてるのが件の下っ端^{くだん}。

「まっ、運が悪かったな」

蜥蜴の尻尾切りにされた事じゃないぞ？そんな事はどうでもいい。
ただ一つ、コイツが死ぬ理由があるとすれば。

「
『オレタチ紅き翼』の敵になるなんて」

別に、帝国に組しようが、メセンブリーナを裏切ろうが、知ったこ
っちゃ無い。だが、『完全なる世界』に繋がっているなら話は違う。
あくまで、表向きの理由で戦争に参加している奴らは気にする必要
はないし、戦場で会えば情けだつて掛ける。命乞いだつて聞くだろ
う。だが、『完全なる世界』は『紅き翼』の敵だ。なら、俺が容赦
する理由はどこにも無い。

「怨みたいなら好きだけ怨め。呪いたいなら好きだけ呪え。そ
れは俺が全て背負って行く」

これは俺が決めた最低限の決意。怨みも呪いも全て逃げずに受け止
めてやる。それぐらい出来なきゃ、この先、俺如きが生きていける
訳が無い。

「あッ、ああ………あ」

「じゃあな」

手に持つククリナイフは、確かに男の死の線を断ち切った。

昔、俺がまだ本当にガキだった時の事だ。

偶にいただろ？喧嘩とかしてるとしゃしゃり出てくる奴。正しく俺がそれだった。その癖、小柄だった所為で毎回ボコボコにされて、よく泣いてたのを覚えてる。

そんな俺を見るに見かねた親父は「一と九を比べて、一を取る奴は独善者、九を取る奴は偽善者だ」とか言いやがった。

小学校低学年のガキに言う言葉じゃねーよ。勿論、そんな言葉が当時の俺に理解出来る訳もなく　　と言つか、今でも何となく出しが理解してないが、多分、親父の雰囲気から何となく察したのだろうが、まあ、少なくとも、それ以来、形振り構わず突っ込んで行く様な真似は自重する様になった。

で、何故今そんな話を始めたのかと言えば、ついさっきまでやっていた事は、俺にとっては『紅き翼』の為の行動だが、ナギ達は怒るだろうな、と改めて思ったからだが　　。

「おっ、ノアじゃねーか」「アン？何してんだ、オメー」「おや？」
「……………」「あっ、ノアさん」

「……………」お前ら、何でここに居るんだよ」

まあ、簡単に言えば、単純な現実逃避だ。

仕事の報告のために、本国の首都まで出向いたのだが、何故かそこには『紅き翼』のメンバー　　ナギ、ジャック、アル、ガトウ、タカミチの五人が揃っている。

ヤダなあ、下手すれば仕事の内容がばれちゃうじゃないか。ガトウ

やアルは兎も角、ナギや詠春辺りは絶対に何か言ってくるぞ？

「さあ？何か、ガトウが会って欲しい協力者が居るんだと」

ナギ、バカのようなバカでも分かる解説ありがとう。お蔭で現状を把握できた。なるほど、確かに原作では『グレートブリッジ奪還作戦』の後だったな、このイベント。正直、もう少し間隔が空くと思っ
ていたんだけど……………。

と言うか、間が悪いなあ。何も俺が仕事の報告に来た時じゃなくてもいいじゃんかよ。

「私はむしろ、何故ノアがここに居るのが疑問なのですが？」

頼むから分かつてる癖にそう言う事を言うのは止めてくれ、アル。さっぱり分かりません、みたいな顔してんじゃねーよ。口元が微妙にニヤ付いてるんだよ。アレか？今の俺が見た目子供だからってアタフタしてる所が見たいのか？このロリコン いや、シヨタコンめ。

後、ガトウもいくら仕事の内容言っでなくて怪しいからって、そんな目で俺を見ないでくれ。『紅き翼』の不利益になる様なマネはしないから。

「集まっているな」

と、いい加減ガトウの視線に耐えるのが厳しくなり始めた頃に、白髪に立派な髭を蓄えた壮年の男性 マクギル元老院議員が登場。

マジで助かった…………… もう少し遅かったら絶対に追求が始まっていた。

ナギ、ジャックは言うまでもなく、詠春やアルは付き合いから俺が

何してても黙認してくれているが、付き合いがまだ短いガトウはそうはいかない。

そりゃ、何も言わずに極秘任務ばかりやってたら疑われて当然なんだが、どうしようか……………。

「って、あれ？詠春とゼクトさんは？」

ゼクトさんは兎も角、原作ではアルじゃなくて詠春が居たはずなんだが……………。

「二人は宿ですよ。ノアが戻って来た時に、誰が残っていた方がいいと言う事で二人が率先して残ってくれました」

「へ……………」

それはまた、何と言うかご苦労様だな、まったく。そんな事しないでいいのに……………。

「口元が緩んですが、どうかしましたか？」

「……………」

「フフフ、そんなに睨まないでくださいよ」

テメエこそ楽しそうな顔してんじゃねーよ。違うからな、別に氣を使ってもらって嬉しかったとか、そんなんじゃないからな……………
・俺のツンデレとか誰得だよマジで。

「ンンッ!！」

マクギルさんの咳払いで強制的に注意をそちらに向けさせられる。と言うか、協力者を紹介しようとしている真っ最中でしたね、そう言えば。でも、その前にやるべき事はやっておこう。

「と言う訳で……ハイ、今回の報告書」

「……いつもすまん」

あからさまに顔を顰めるマクギルさん。

それは劳いの言葉と言うよりも、むしろ黒い仕事ばかり回している事に対する謝罪の様に感じた。

『紅き翼』直属の担当はマクギルさんが勤めている。と言う事は当然、俺に回ってくる仕事は基本的にマクギルさんを通して依頼されている。それはつまり、マクギルさんは任務の内容　　少なくとも、表向きの理由と内容は目を通していると言う事だ。

マクギルさん本人としては、俺にそう言う仕事を回したくないらしいが、複雑怪奇に絡み合った政治的な事情がそれを許さない。使える者は猫でも使えと言った風に、次から次へと仕事は舞い込んでくる。特に、西洋魔術師は『偉大なる魔法使い』^{マギステル・マキ}の思想が強い所為か裏の汚い仕事を良しとしないため、完全に需要と供給が釣り合っていない。

そんな状況じゃ、マクギルさんの意志なんて関係なく、俺は大忙しになる、と。勿論、その依頼の中の殆どは自分達の不正の揉み消し。まともなのはマクギルさんの仕事ぐらいってどうなんだろうな。

ついでに、マクギルさんを除く元老院の老害共は、俺がどんな依頼でも受ける所為か、俺を完全に手懐けた気でいるらしい。

バカだなあ。自分の首を絞めているとも知らずに……。ついでに、アイツらも知らない所で、報酬はキツチリ奪って^{ウハウハ}もとい、貰っているって言うのに……。

「ノ、ノアの奴、何か黒い笑顔浮かべてないか………?」

「フフフフフ………」

「お、おい、アル。お前、笑ってないで止めて来いよ」

「……………」

後で聞いたが、クツクツク、と暗い笑みを浮かべていた俺を見て、ナギやジャックが冷や汗を掻いていたらしいが、まあ、それは割とどうでもいい話だろう。ついでに、何度も話を流されたマクギルさんが涙目になっていたのも同上。ガトウが俺を疑う様な目付きで見ていたのも割と以下省略。

「ウエスペルタイア王国……………アリカ女王」

紆余曲折あつて漸く紹介されたのは、長い金髪にオッドアイの美人さん　　本名、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア。現在巻き起こっている大戦の原因となった国の女王サマ。

ついでに、俺は会った事ないけど『黄昏の姫御子』の姉なんだと。取り敢えず、ナギの嫁って覚えとけばいいだろう。

そんな協力者との会談後、「ワハハハ、お姫様とイチャイチャしやがって」
「してねえよ、バカ!!!」
「ありやいい女だぜ?」
「

ジャックはマゾだったのだ。」「な、何だってー!?」「そう言う所がガキなんだよー」みたいな会話を仲良くしているナギとジャックを、遠くから俺は温かい目で見守っていた。詠春やアルも似た様なものだ。ガトウはタカミチ連れてどこかに行ってしまった。また調査とかそこら辺だろう。仕事熱心なのもいいが、偶には休むって事を知るべきだな、うん。

「……お前が言うな的なツツコミは一切受け付けないから。」

「ノア。今度は結構長かったみたいだが……大丈夫だったのか?」

詠春は相変わらず、俺の心配をしてくれているらしい。同じ日本人だからかね?ここまで気を使ってくれるのは。でも、もう少し信頼してくれてもいいんじゃないか、とも思わなくも無かったり。

「ただ単に幾つか一遍に仕事が来たただだからな。問題ないよ」

俺がそう返すと、詠春は安心した様に「そうか……」と呟きを漏らす。全く、何が一体そこまで心配なんだか……。詠春は向けられている俺の視線から意図を読み取ったのか、決まり悪そうに目を逸らす。

「いや、何と云うかな……。お前はナギとは別の意味で危なっかしい感じがしてな……」

詠春自身も感覚で捉えているらしく、しどろもどろに語るが、まあ、言いたい事は何となく分かる気がする。

俺は基本的に一人で個別に行動する事が多い
と云うか、『紅き翼』と同じ戦線に立ったのは『グレートブリッジ奪還作戦』の時だけだ。しかもその時ですら単独行動。詰まる所、『紅き翼』

と行動を共にするのは何もない平穏な時だけで、交戦中なんて言う一番危ない時には姿が見えない。そりゃ不安にもなるさ。

憶測で語らせてもらうなら、詠春が感じているのは親しい人間が遠くに行ってしまう様な、そんな感覚だろう。まあ、合ってるかどうかなんて言うのは、詠春にも分かってないなら誰にも分からないだろうけど……でも、これだけは言える。

「俺は『紅き翼』にいるさ」

その後にく、『紅き翼』は、俺にとって家なんだから、と言う言葉は流石に飲み込んだ。だって、素面でそんな事言うのは恥ずかしすぎるだろ？でも、詠春が驚いた様な顔をした後、破顔した所を見るに、言わなくても伝わってしまった様だ。

わー、以心伝心だー。家族って素晴らしいー……。クソ、また黒歴史が増えちまったじゃないか。……だからアル、そのニヤニヤした顔は止める。聞いてやがったなこの野郎。

「はぁ……鬱だ」

どうも、恥ずかしさから来る顔の火照りは、暫く収まってくれそうに無いらしい。ちくせう……。

さて、これから暫く、『紅き翼』は首都での休暇に入るのだが……

・・・当然、それは俺以外の奴の話。先も話したが、まともに裏で動く人間が俺しかないから休暇なんぞ与えては呉れないのよ、あのクソ爺共は。

まあ、ナギ、ラカンを除く他のメンバーも首都での休暇は基本的に『完全なる世界』の調査に回すって言うてたから、やってる事の実質は、そんなに変わらないんだけど・・・・・・。俺のはそれに少しだけかくれんぼとゴミ掃除が付いたくらいだし。

ただ、言わせてもらえるのなら、ナギよ。お前、休暇中にアリカ女王の護衛って・・・・・・それ、ただのリア充じゃねーか！！ちくしょう、俺らが働いている時にあの鳥頭は・・・・・・！！嫌がらせか？前世から恋人どころか好きな人さえ出来なかった俺に対する嫌がらせか！？・・・・・・自分で言うて悲しくなってきた。ええそうですよ、前は友人なんて殆どいませんでしたよ！！嫌われ者でしたよ！！悪いか！？

「あ？何寝ながら泣いてんだよ」

「頼むから、暫く放っておいてくれ・・・・・・」

前世の記憶の黒い部分スリットのスイッチを押してしまい、ソファに寝転んだままさめざめと泣く俺に、ラカンが首を傾げるが、そんな事気にする余裕はありません・・・・・・。

前世では友人はいたが精々一人か二人。一部の奴ら 特に男

子には物凄く嫌われてた。何度殴り合いの喧嘩になった事か・・・・・・。一人で二人以上（武器あり）に勝つなんて、漫画じゃないんだから無理に決まってるだろ？当然、リンチされて目が覚めると保健室、と。我ながら荒れた前世だな、オイ。何だっけなー、確か、友人曰く、「腐った魚をミキサーに掛けてドブに投げ捨てた様な目、その上目付きが悪けりゃそりゃ喧嘩も売られるさ」との事らしい。そこまで言わんでも・・・・・・。

すぐ側でラカンとガトウが今の執政官　　つまり、メガロメセンブリアのナンバー2まで『完全なる世界』と繋がっているとか何とか話しているが、今の俺に動く様な元気はなし、頭の中のリストに入れるだけに留めておこう。俺が見逃すと思うなよ……………？

ズズン

ッ！！

二人の会話の横でトラウマに影響された仄暗い決意を固めていると、遠くで何かが爆発する様な音が部屋に響く。それと同時に、左眼に感じる僅かな痛み。それはつまり、この爆発は魔法による物と言う事だ。急いで体を起こして窓へと視線を向ける。そこに見えたのは、黒い煙を吐き出している炎と、それによって燃えている市街地。

「ガトウ。ナギとアリカ姫は今街に居るんだっただな……………？」

「あ、ああ。それがどうか……………まさか!？」

ガトウの返答に舌打ちしながら魔眼を発動。二人も俺の言わんとする事に気付いたのか、ガトウはどこかに電話を掛け始め、ラカンに至っては、既にいつでも出撃出来る様に気を引き締め、戦闘態勢を作っていた。

そんな二人を尻目に、急速に広がる俺の董色の視界に映っていたのは、燃え盛る炎と逃げ惑う人々の魔力。そんな中に、一際目立つ、バカみたいにデカイ上に雷の様な光を放つ魔力と、綺麗な黄金の輝きを放つ魔力を捉えた。ナギとアリカ姫だろう。瞬動で移動しようとしている所を見るに、二人とも無事みたいだ。

「ナギとアリカ姫は無事。どうも下手人を追跡中っぽい。追い付けなくもないけど……………あの二人なら問題ないと思う」

「こつちもメガロメセンブリアに連絡を入れておいた。数分もせずに警備部隊が到着するだろう」

「チツ、今回はバトルなしか……………」

ジャック、バトルがないからって舌打ちするなよ、不謹慎だから。と言うか、緊急事態に對しての、この対処の迅速さは何なんだろう。か。手馴れすぎだろ、流石に。一人一人がそれぞれに出来る最良の選択を出来る上に、過剰戦力が揃ってるとか……………。やりすぎじゃないか？今は兎も角、後で潰されたりしないよな？特に元老院の肩共辺り、とそこら辺の危惧は今はまだ必要ないし、それをさせない為の俺だ。それに、今はまだやる事もある。

「まつ、取り敢えず行つか」

「分かってる」「おう」

何処に、だって？そんなもん決まってるだろう？民間人の非難だよ。俺は敵には容赦ないけど、それ以外は、困っている所を見れば、手ぐらい差し伸ばすさ。そんなどこぞの殺人鬼じゃないんだから……………。まあ、俺の事を強いて言うなら、容赦が無くなった人類最強の請負人？イメージカラーは黒だけど……………。取り敢えず、今は全力を尽くさせてもらおう。

今回の一件では、怪我人はいくらか出たが、死傷者や重体の者はなし。
報酬は執政官の不正の証拠……と、ナギのアリカ姫フラグ。後者は兎も角、これでまた話が加速する事になる。それと同時に、俺の忙しさも加速する訳だが、まあ、『紅き翼』が無事なら、俺はそれでもいいと思ってたり……。

「マクギル元老院議員」

ナギが例の証拠品を見付けてから数日後、俺達は再びマクギルさんの元を訪れていた。

ここまでの流れにイレギュラーは無い。

アリカ姫はヘラス帝国の第三皇女と接触を試み、俺、ナギ、ジャック、ガトウの四人は弾劾手続きの為にアリカ姫と初めて会ったあの広間の様な所にいる。ついでに、他の『紅き翼』のメンバーはそれぞれ宿で待機だ。

「御苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

こちらに背を向けたまま、ガトウの呼び掛けに反応するマクギルさん。俺は、左目の^{まぶた}瞼は閉じているが、既に眼を発動させている。
……いや、いっちゃあ悪いが、もう面倒臭くなってきたん

だよ、色々と。だから。

「死ねよ」

瞬動を使い、一瞬で接近。こちらを向くよりも早く、愛用の黒コー
ト 『黒の聖域』 から取り出したククリナイフで容赦なく斬
りつける。狙いは首

！！

ザンツ

！！

ナイフが肉を断つ音がする。ナギを除いた『紅き翼』のメンバーの
呆気にとられている顔を、眼によって広がった視界に捉える。そし
て目の前で崩れ落ちる首なしの体。
だが。

「やれやれ。少しばかりがつつき過ぎじゃないかい？」 『正体不明の
英雄』

だが、それでも奴は生きていた。

「チツ……………」

さっき、確かに俺のナイフはマクギルさんに化けたアーウェルンク
スの首を切り飛ばした。だが、現にアイツは俺の後方に立っている。
そして、俺の眼が見た魔力の流れ……………。

「入れ替わりやがったな、幻影と」

「ご名答。流石だね、『^{アンノウン}正体不明の英雄』。やはり、その『眼』のお蔭かい？」

やつぱり……。俺の接近するのを感じ取り、マクギルさんの形だけの幻影を作って転移、か……。流石はアーウエルクス、って所か。普通の魔法使いどころか、一流の魔法使いでも出来ない様な事をやってのけやがって。よくこんな奴に勝ったな、原作のナギ。と言うか、むしろ原作より強くなつてないか？もしかして俺の所為かも……。

「タネを教える手品師なんて、いねーだろ？」

「だろうね。だけど」

「俺らの事を忘れんなよ！！」

アーウエルクスの言葉を遮ってナギ達が乱入してくる。姿を変えていた魔法が消えた事で、状況を把握したらしい。

ナギは俺との会話の内に詠唱を完成させた『千の雷』、ジャックはアーティファクト『千の顔を持つ英雄』の斬艦剣、ガトウは『咸卦』による豪殺居合拳。その三つがアーウエルクスに叩き込まれる。さらに、僅かにタイミングをずらされている事で避け辛い上に、どの一撃もともに喰らえば致命傷。

今の状況下における最高の、絶対に回避不可能な連撃。

ドン

ッ！！

「君たちの様な実力者を忘れる程、間抜けじゃないんだよ、ボクは」

だが、それは相手がアーウェルンクス一人だけだった場合だ。
事実、三人の攻撃は突如として現れたアーウェルンクスの従者達に防がれてしまった。一人一人が『紅き翼』のメンバーと渡り合える程の実力者。それも原作では二人だった筈の男が三人に増えている。よつぱど警戒してくれていたらしいな、こん畜生。

「強えぞ、やつら!!」

「分かってらア!!だが、勝てねえ相手じゃねエ!!」

ナギ達の方も、相手の実力を的確に見抜いているらしい。だが、今の奇襲が失敗に終わったって事は――。

「わ、わしだ!マクギル議員だ・・・うむ、反逆者だツ!!ああ、うむ。確かだ。奴らに暗殺されかけた・・・は、早く救援を頼むツ!!」

だよなあ!!演技が上手いじゃねーか、クソ!!

今日、この時間に俺達と会談してた事は記録に残ってる。名前を出されなくても、通信で「暗殺されかけた」と言えば俺達が疑われるに決まってる。つまり、通信された時点でこっちは詰みだ。

「チツ!!」
『ジグザグ曲弦系応用・とおせん十閃』!!」

最後の悪足掻きに、と自らの力だけで気を通した十のワイヤーをアーウェルンクス目掛けて振るうが、それも従者の炎によって焼き払われる。

どうも、あの従者達が使う炎や水は種族的なスキルの様で、眼による先読みが出来ない。いや、脅威メナスによる先読みなら出来るんだろう

が、魔法だつて言う思い込みから『妖精眼』グラムサイトの能力しか使つてなかつた所為で反応が遅れてしまった。
と言つか、最初に使われた時に気付けよ、俺！！

「君達は少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

アーウェルンクスの言葉と同時に、術式が展開され、魔力が流し込まれる。

抵抗出来ない事もないが、今回はこれ以上やっても意味がない。万に一つもないが、連合に捕まったら面倒な事にしかないし、ここいらが引き際か……………。

そう考えて、ナギ達に念話で脱出する様に伝え、それぞれから返事があつたのを確認して、俺も影を使った転移用の陣を展開する。
…………『煉獄』の魔法陣を仕掛けてから。

ドオオオオオオ

ッ！！

巨大な石柱に砕かれた部屋が、爆発により更に破壊されるのを眼に捉えつつ、俺はナギ達の元へ転移した。

「ゲホッ、ゲホッ！……ハア、死ぬかと思った……」

「何してるんだよ……」

ぶつちやけ、溺れ掛けた。

呆れながら俺を見るガトウの視線が痛い……。いや、ナギ達にマーキングしといて、それを目印に転移したんだけど、転移した先が水の中でな？『黒の聖域』から武器を取り出す手間を省く為に、暗器術で服に色々仕込んでいたのが完全に裏目に出てしまった……。

ちょっと引くぐらいの速さで沈んだぞ……？

「昨日まで英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフ、いいねえ。人生は波乱万丈じゃなくっちゃな」

「タカミチ君達は脱出できたかな……」

ジャック、お前は少し黙ってる。そして出来れば俺の代わりに沈んでくれ。語尾に音符なんぞ付けやがって……。少しはガトウを見習ってくれ。

まあ、タカミチには詠春とゼクトさんが付いてるから心配はないだろうけど……。

「……姫さんがやべえな」

「だな。じゃ、行きますか、リーダー？」

深刻そうな顔で呟くナギに茶化す様に言ってみる。まあ、そう手荒に扱われる事もないだろうし、俺達が助けに行けば問題はないだろう。そう言う意図を込めて言ったのだが……確りと伝わったらしく、いつもの調子で。

「おう!!行くぞ、野郎共!!」

と、力強く指示を出してくれた。やっぱり、ナギはコレぐらい元気があった方がいい。俺達のリーダーなんだし。じゃ、行くか。『夜の迷宮』へ……。

「ところで、大丈夫なのか？アレ……」

「アレって？」

「元老院。原形留めてねえぞ？」

「他に人はいなかったのか……？」

「……だ、大丈夫じゃない、かな……？」

取り敢えず、今度から大規模魔法を使う時は周囲に気を配る事にし

ようそうしよう。そう心に決めた俺だった。

後日確認した所、幸い死者はいなかったそうな。……………負傷

者は多数出たらしいけど、まあ、問題ないよな!!

……………今度から気をつけます。

女王サマ登場だそうだ（後書き）

トライピース九巻漸く読めたよ！！クロちゃん可愛いよクロちゃん・
・・・・・と思ったら、また男の娘か！！・・・・・どうしよう
かなあ、戦争扇動機関。多分出さないけど。

取り敢えず、前より少しばかりシナリオが変わってますので。原作
ブレイクって言える所も少々・・・・・。そして、今更ながら、
時間停止の無理矢理さに気付いた私って一体・・・・・。

あ、感想や疑問点は是非。

反撃の狼煙だそうだ（前書き）

一ヶ月以内更新に間に合わなかった・・・ウヴオア。
あ、後書きでちよつとしたお知らせがあるので。

反撃の狼煙だそうだ

ズズウン

「よお。来たぜ、姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

捕らわれていたアリカ姫とそれを助けに来たナギ、か。感動の再会
つて奴かね、これも。

まっ、ぶっちゃけ『夜の迷宮』は特に苦戦する事無く簡単に攻略完了、と。

『完全なる世界』の構成員も幾らかいたとは言え、『夜の迷宮』の警備の殆どが迷宮内に存在する精霊や魔物の類だったんだが、魔を
 関するモノの一切を見抜く『妖精眼』と、モノの死を線や点で視覚
 化出来る『直死の魔眼』の二つの効果を併せ持つ『眼』を持つてい
 る俺や、元々退魔を専門とする『京都神鳴流』を使いこなす詠春が
 いた所為で、普通であれば苦戦を強いられる様な戦いをあつさりと
 快勝。

ついでに、『妖精眼』の所為だと思うが、人間よりも精霊や魔物の方が殺しやすいと言う新事実も判明。今度時間を作って色々調べなくきやな……。

最初の崩壊音については、『夜の迷宮』突入後、すぐに俺が『眼』を使つて視界を広げ、アリカ姫がいると思わしき場所までの最短ルートを割り出したんだが、ナギが「メンドクセエ！！」とか言いながら壁をぶち破つた音である。

大魔法で綺麗に一直線のルートを作ってくれやがりましたよ、あのバカ。アリカ姫が幽閉されている部屋でも、俺が普通に鍵を開けようとしたにも拘らず隣で壁ぶっ壊してるしさあ。

どんだけアリカ姫の事心配だったんだよ、マジで……。

それで会ってからの第一声がアレだぞ？もうリア充爆発してくれないかなー、と本気で思った俺は悪くないはずだ。

つうか、『夜の迷宮』って結構価値のある遺跡とかじゃなかったわけ？管理人とかいねーよな……？

まあ、それは後で調べるとして 万が一いた場合は全力で『完全なる世界』に罪を擦り付ける事にしよう 、俺達『紅き翼』+ は、『夜の迷宮』からタルシス大陸極西部に位置するオリンポス山の隠れ家にまで移動していた。

「何だ、これが噂の『紅き翼』秘密基地か！どんな所かと思えば……掘っ立て小屋ではないか！！」

「俺ら逃亡者に何を期待してんだ、このジャリはよ」

俺達はジャックと褐色色の肌に長い金髪、さらに頭に巻き付く様に角が生えた少女 ヘラス帝国の第三皇女、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアのほぼ同レベル言い合いを何とも言えない気持ちで眺めている中、ナギが口火を切った。

「さーて、姫さん。助けてやったはいいいけどこっからは大変だぜ？連合にも帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です、女王殿下。殿下のオスティアも似たような状況で……。最新の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』……と言う可能性さえ上がっています」

「やはりそうか……」

ガトウからの情報を聞いても、アリカ姫が表情を変えず平然として

いる所を見ると、やはり最初から予想していたんだろう。

この人はそれが予想出来ないほど無能じゃないし……と、そんな風に場を観察していると、クイクイと『黒の聖域』を引つ張られるのを感じ、そちらに視線を向けてみれば『黒の聖域』の袖を握り俺を見るテオドラがいた。

「お主は誰じゃ？」

「あー……………」

小首を傾げながらそんな疑問を口にする第三皇女に、どう答えたものかと頭を悩ませる。

いや、まあいつもみたいに包帯でグルグル巻きにしてるなら兎も角、今日は隠れ家に来てすぐに包帯外してたから分からなくてもしょうがないんだが……………。原作で超展開とかがない限り別にバラしてもいいよな……………？

「えつと、『アンソウン正体不明の英雄』って言って分かるか？それとも『死神』か？」

そう言った途端、テオドラの顔が目に見えて青褪めていく。……
……何この反応。

「し、『死神』、じゃと……………！？い、嫌じゃ……………わ、妾はわらわまだ死にたくない……………！！」

……………俺、帝国でどんな扱いになっているんだ？何かもうテオドラの奴泣きそうな表情になってるんだけど……………つかジャックの奴はどこに行きやがったんだ！！原作じゃテオドラの相手はアイツの仕事だっただろ！！

「いや、殺さないし。別に殺人が趣味の殺人鬼って訳じゃないんだから……………」

「ほ、ホントなのか……………？兵達は『死神』を見た者が最後、見た者は皆死^{みな}んでしまつと……………」

何と言うか、涙目の子供に見られるのってキツイね、精神的に。俺が悪いつて訳でもないのに罪悪感が……………。

後、帝国の兵は戦争が終わつたら一遍絞める。俺の戦い方が悪いのかもしれないが、子供にまで言つてんじゃねーよ。つうか完全にホラーじゃねーか、見たら死ぬつて……………。

「ホントホント。本名は夜野空な。はい、よろしく」

「う、うむ。妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ」

取り敢えず、警戒心を解こうと思い、普段じゃあり得ないほどフレンドリーに自己紹介しながら手を差し出すと、テオドラも俺が危害を加えるつもりはないと言う事が分かったのか、涙を引っ込めて握手に応じてくれた。

……………いや、これが精一杯なんだって、俺のフレンドリーは友人殆どいなかったからね？むしろ敵の方が多かったからね？

「おつ、何やってんだノア　　いや、今は空だっけ？つうかそのガキいるのに顔出して良かったのか？」

と、テオドラと打ち解けられた事に表情には全く出さず、内心で安堵していると、今までどこに行っていたのかジャックがいつもの間

るか？体の方も一から鍛えた方が良かったか……？

「いきなり何しやがる！！」

「うるせー！！テメーがテオドラの相手してりや俺が怯えられる事もなかったんだ！！」

「いや、そりゃ遅かれ早かれあつただろ」

「……………」

ジャックに諭されてしまった……。いや、ぶっちゃけ、テンパって逆切れしたただけだけど。むしろ礼を言うべきなのか？ん……………」

「まっ、いつか」

「何一つよくねーぞ！？」

そんなに細かい事気にするなよ、ジャック。と言うか、むしろ気にしないで下さい。お願いします。

いや、子供は特に苦手なんで。ゼクトさん？あの人は見た目だけで精神的には大人すら超えてるからノーカンなんだよ、俺の中ではな。

『じゃが……お主とお主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？』

と、どうやらナギ達の方の話はそろそろクライマックスっぽいな。ここら辺は好きなシーンだったから豪く記憶に残ってるが、ガキのままの姿じゃ流石に締まらねーか……………。
と言う事で、初めてのアレ、いつてみよう。

ゴキ。

「ひい!？」

バキ、メキメキメキ。

「ひいひい!？」

はい、肉体年齢の操作完了。

今が大体十七、八って所かな？幻術とは違って煙が出てポン、じゃなくてむしろ『骨肉自在』みたいな感じで随分と生々しい事になったが、まあ視点もキツチリ高くなってるし、問題ないだろ。

「……またテオドラが怯えてるんだけど、理由は『骨肉自在』
モドキって事でFA？
ファイナルアンサー

ジャックは……もう向こうに行っちゃってるし、まあ怯えさせた俺び代わりだ。

「よっ」

「おおっ」

と、軽く持ち上げて原作でジャックがやっていた様にテオドラを肩車するが、それにしても子供って軽いなー……。

「のう、さっきのは何だったのだ？」

十数年生きてきて初めて知った事にしみじみ感心していると、テオドラが上から顔を覗き込む様に訊ねてくる。

まあ、目の前でいきなり人が軟体動物宛らな動きをすればそりゃ気

にもなるか。

「ん、まあ見ての通り、体の年齢を引き上げたただだよ。そう言う能力なんだよ、さっきのは」

「奇妙な能力を持っているのう」

確かに。コレ、あんまり使う場所ないな……。変装に便利だと思つて貰いはしたが、顔隠してりや変装もクソもねーじゃん。だがまあ、そう言う事は後で考えよう。

『ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ』

ほら、折角良い所なんだからさ。

『……。へ、やれやれ。相変わらずおつかねえ姫さんだぜ』

不敵に笑うナギと、両の手で握った剣を掲げるアリカ姫。そして。

『いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう』

アリカ姫の前に、まるで騎士の様に跪いたナギの肩に、アリカ姫の剣が添えられる。ソレは、ちょうど山を越えてきた日の光を浴び、宛ら一枚の絵の様に、ひどく美しく見えた。

（ハハッ、やっぱり、主人公とヒロインはこうでなくっちゃな……。・・・）

ここから俺達、『紅き翼』の反撃が始まる。

「さて、じゃあ取り敢えず始めよつか」

今後の活動の方針を立てる為に、と全員がアジトの中に入り落ち着いた頃を見計らって、俺は口火を切った。それと同時に動き出す『紅き翼』のメンバー達。

「へ？」

目的を達成するには、一秒も掛からなかった。

ポカンとした顔のアリカ姫とテオドラ、タカミチの三人。それと、アルに重力魔法を掛けられ、詠春からは刀を突きつけられた上に、ジャックに力尽くで押さえ付けられ、保険に、と俺の糸と音で肉体の支配権を奪われ地面に伏せっている

ナギ。

「なっ、何しやがるテメエ等！！」

まだナギは気付いていない、俺達『紅き翼』のメンバーのほぼ全員がにこやかな

一種の悪寒すら感じる様な笑みを浮かべている事に。

例外はこの後の展開に頭を悩ませているゼクトさんと、このメンバーに押さえ付けられているナギに哀れみの表情をしているガトウぐらいか。尤も、ガトウもこの計画には確りと参加しているし、いつでも『居合い拳』が放てる様に、手はスーツのポケットに収められている。

この計画を聞かされていなかったナギを除くアリカ姫、テオドラ、

タカミチの三人はどうしていいのかわからず動くに動けない。
そんな一種の膠着状態の中、アルが一步前に入る。
いい笑顔で。

「おいアルツ！！これは一体どう言う事だ！！」

「そんなに怒らないで下さいよ、ナギ。これは全て貴方の為を思っ
てやっている事なんですから」

「あん？俺の為だあ？」

アルはナギに「ええ」と頷いて見せ、どこか楽しさを隠し切れてい
ない表情でこの計画のネタバラシを始めた。

「いいですか、ナギ。これから先、戦いの激しさは増す一方になる
でしょう。当然です、今ここにいるメンバー 戦える人数だ

けならばたったの七人です。その七人で世を相手取り、さらには『
完全なる世界』と例の白髪の男やその従者まで倒さねばなりません。
その為に、『紅き翼』も戦力を増強する必要があると思いませんか
？」

「そりゃそーだろうけど、今の俺達に手を貸してくれる所なんざ・
・・・」

「それは百も承知です。ですが、人数を増やす事だけが戦力の増強
ではないでしょう？今いるメンバーを鍛えなおす事も、戦力の増強
に繋がるはずです」

ニコニコと言葉を続けるアルに、いい加減ナギの奴も何が言いたい
のかわかってきたらしく、話を聞くにつれて徐々に顔が引きつり、

冷や汗を掻き始めている。

「とは言え、今いるメンバーの殆ど既に完成されており、どれだけ鍛錬をしようと先が見えている者ばかり。さて、どうしましょうか」

「そつ、空はどうなんだよ！アイツはまだ伸びるんだろ！？」

ナギはどうにか矛先を変えようと俺の名前を出すが、俺がこちら側にいる時点で無駄だと気付くべきだったな。

「確かに、空もまだまだ伸び代はありますが、それはあくまで肉体面の事なので魔力や気での強化で事足りています。ですが、貴方は違いますよね、ナギ？」

「グッ………！！！」

言葉に詰まるナギに、アルは更に追い討ちを掛ける。

「魔法は生まれ持った魔力に頼りきり、術式はメチャクチャ、未だにアンチヨコを見ながらでないと呪文が唱えられない上に、そもそも数個しか呪文を知らない」

そしてニツコリと微笑み

。

「何か異論がありますか？」

フィニッシュ
止め。

これからの修行を思ってたか、ぐったりと動かなくなつたナギを尻目

に、ホクホクといい笑顔のアル。

まあ、魔法の修行　　それも魔力運用については兎も角、術式だの呪文の詠唱だのの殆どはナギの苦手な座学で、実践はほんの僅か。学生だった身としては、その気持ちはよく分かるんだが、今回はばかりは頑張ってもらおう。

と言うか、提案者は俺だしな。他のメンバーの参加理由は「そうすべきだから」、と言うのが建前で本音は「（ナギの様子を見るのが）面白そうだから」。

ホント、いい性格してるよコイツ等。まあ俺もあんまり人の事言えないけど…………。

「そうですね、ノルマはナギの二つ名に因んで千ほどにしましょうか」

「ゲエツ!？」

コレは先に俺が決めていた事だったりする。どうせ『千の呪文の男』なんて名乗ってるなら実行してもらおうじゃないかって感じで。

「ちょ、ちよつと待て!」

と、ここでアリカ姫が待ったを掛けた。ナギは救いの主を見たとにかくに「姫さん…………」なんて呟いているが。

「ただでさえ時間がないと言うのに、この鳥頭にそんなマネが出来るものか!!!」

現実には辛く厳しかった。

もうナギの奴、「姫さん……………」って泣きそうな声なんだけ

ど。つつか私だけは信じてる、みたいなのが王道なんじゃないのか？いや、確かに冷静に考えれば無理だけどさ。
がだ、まあ……………。

「時間は気にしないでいいぜ？その為にコレを造ったんだから」

そう言つて俺が『黒の聖域』から取り出したのは、ミニチュアの模
型が入ったガラス瓶 言わずと知れた『ダイオラマ魔法球』、
通称『別荘』である。

勿論、ただの『別荘』なんかじゃない。俺とゼクトさんが悪ふざけ
もとい、技術と知識をありつたけ注ぎ込んだ特別製だ。

「コイツは中と外の時間差の割合がおおよそ八万六千四百対一……
……言い換えれば、外での一秒が中での一日だ。一時間も籠れば
中での日数は約十年。それだけ時間がありや十分だろ」

「……………よくもまあそんなとんでもない物を」

こめかみを押さえて絞り出す様なアリカ姫の呟きに周りに何とも言
えない沈黙が広がる。……………何だよ、その「まあ、空だしな
あ」みたいな顔は。

その『別荘』が造れたのもゼクトさんの協力あつてこそだぞ？俺は
知識はあつても技術がないから……………って、そんな事よりナ
ギだナギ。

「じゃ、行つてらっしゃい」

俺の言葉に反応して、『別荘』への転移魔法陣がナギとゼクトさん
の下に現れる。……………っと、忘れてた。

「中にいる間はそれ付けてな」

そう言つて消える間際のナギにポケットから取り出した指輪リングを放る。受け取つた瞬間に転移してナギは疑問符を浮かべていたが、まあゼクトさんが中で説明してくれるだろう。

さっきの指輪リングは周囲の魔力を吸引し、肉体を活性化させ老いを一時的に止める事が出来る女性には喜ばれそうな一品だつたりするのだが、欠点は特別周囲の魔力が濃い『別荘』なんかの魔法空間ぐらいでしか使えない事か。改良しようと思えば幾らでも改良出来るが、ぶつちやけ今回の為だけに作つた物だし、その予定は今の所なし。金に困つた時にでも売るか、と画策したりもしているが、それを考えるのはこの大戦が終わつてからだな。

と言つ訳で、この大戦を終わらせる為にも、出来る事をする事にしよう。

「作戦会議始めようとしてる所悪いけど、今回も俺は単独行動つて事でよろしく!!」

と、言い放つて全員が呆氣に取られている間に転移魔法を発動する。取り敢えず、元老院共もろゝんからの依頼の情ほうじょう報が役に立つ時がきたな、クツクツク……。

『…………ハアアアアアアアアアア!?!』

「フッフ、相変わらずですね」

……………転移する直前、約一名を除く仲間全員からの驚愕フーイングの声が聞こえてきたが、もう既に時遅し。帰つてきた時に説教の可能性もあるが、今回ばかりは見逃してもらふ事にしよう。

何せ、折角俺自らが自主的に、自らの意思で動くんだから……………

•
o

反撃の狼煙だそうだ（後書き）

正直、子供時代のテオドラサマの口調が難しく感じる今日この頃、相変わらずナギの更なる強化だけは何度書き直そうと絶対にやらかす目だけです。

魔法だの何だの設定についても色々と無理をなくしたりはしてますが、ナギの強化だけは絶対にやります（キリッ）

改変前と違って、今の空の身体能力は強化無しだと精々一般人よりも少し強い程度。戯言を読み直して、大して鍛えてもない奴がこれを使えるのもなあ、と思った結果ですね。

そして肉体年齢の変更を使うのは今回が最初で最後になる予定、無駄にはしませんが、出番はないでしょう（笑）

隠れ設定として、空は楽器が使えなかつたりするので、音使いのスキルの殆どは声や足音なんかで代用しています。練習もせずに楽器が使えると思うなよ（笑）

知ってるか、もうすぐこの小説投稿初めて一年なんだぜ……？いや、一度消したからなんで、本来なら流石に二十話は越えてたはずなんですけどね？

感想、批評批判、アドヴァイス誤字脱字などありましたらドンドンお寄せ下さい。作者の技量向上（笑）につながります。

・お知らせ

実は現在、作者は高校三年生です。つまり受験生。流石に勉強しなければならぬので執筆に割ける時間が今以上に減ります。更新停止はしませんが、今まで以上に更新が遅くなります。申し訳ありません。

三ヶ月ぶりの帰還だそうだ（前書き）

本当にお待たせしま s . . . あ、別に待ってない？ですよー w
w w

指摘頂いた点を修正しました。

後で、ぶっちゃけコレ分ける必要なかったんじゃない？と思い直して、少々？加筆しました（笑）

三ヶ月ぶりの帰還だそうだ

『正体不明の英雄』^{アンノウン}・夜野空が行方を晦ませて約三ヶ月。その間、^{かん}情報収集に肉体労働、外交、と『紅き翼』はそれぞれに分かれて行動し、成果が出てきているにも拘らず、彼らには重苦しい雰囲気^{かん}が漂っていた。

その原因は夜野空ではあるが、勿論、誰一人として空の事を心配している者はいない。

あの真正正銘の意味でチートの心配をする事がどれだけ無駄な事が、メンバーの全員が正しく理解しているからだ。いや、例外として詠春は心配していたが、それも「ちゃんと睡眠は取っているのか」「ご飯は三食食べているのか」など、一人暮らしを始めたばかりの息子を持つ過保護な父親の様な微笑ましいものである。

では、何故。

それは偏に、『空が何をしようとしているか分からない』と、その一言に尽きる。

この際だ、はつきりと言おう。

夜野空は天然だ。

本人に自覚はないが、いや、自覚がないからこそ一般の行動理念や常識から頼る^{たより}ずれている。故に、時たまとんでもない事をやっている。

既に『紅き翼』のメンバーは、新たに協力者となった人物から、空が『正体不明の英雄』^{アンノウン}として元老院から受けていた任務の全貌を聞かされ、全員揃って頭を抱えた後の事だ、不安になってもしようがない
と言うよりも彼らには嫌な予感しかしなかったそ

うだ。

そしてその予感は的中する。

最近集まった情報の中で『メセンブリーナ連合、ヘラス帝国、ウエスペルタティア王国を問わず、各国の重役が暗殺されている』と言う物を発見した彼らは『あ、コレ絶対にアイツだ』と確信し、満場一致で叫んだらしい。

『何やってんだアイツはアアアアアアアアアアアア！！！』

ついでに、さらに質の悪い事に、空は今までの任務の中で一切証拠を残さず、かつ迅速に暗殺すると言うスキルを身に付けてしまっている様で、情報が彼らに伝わって来た時には既に別の場所で暗殺に勤しんでいるらしく、もう手の打ち様がない。お手上げもいい所だ。まさか元老院も飼いだと思っていた存在に手を噛まれる

否、喉元を食い千切られるとは思ってもなかっただろう。とは言え、事件の犯人が空である事を知る者は『紅き翼』以外いない為、元老院はその事実ですら気付いてないのだが…………。

先んじて警備の強化や侵入者捕獲用のトラップを仕掛けてはみたものの、どれも空振り。どう言う手段を用いているのか、それら全てを掻い潜り、回避し、欺く。お陰で完全に行方不明となっていた

なっていたのだが…………。

「ただいまー」

三ヶ月くらい留守にしてたけど、皆元気かなー。まあ元気だろうな、心配するまでもなく。つうか、ここまで心配する必要がない仲間って一体……、なんて事を考えながら、実に久しぶりに『紅き翼』の隠れ家の玄関を潜った、俺　　夜野空は、その隠れ家の中に蔓延する思わぬ怒気に固まってしまった。……どう言う状況なのこれ。

「おや、空　　いや、今はノアですか。随分と久しぶりですね、三ヶ月と言った所でしょうか……」

まるで見計らった様なタイミングで現れたアルは、三ヶ月前と変わらず白いローブを着込み、その中性的な顔には笑みを浮かべているのだが……何と言うか、怖い。本来、笑顔と言うのは威嚇や脅迫に使われる物である、なんてどこかで聞いた用な言葉がとっさに頭に浮かぶぐらい怖い。

「……えーっと」

「ほら、玄関なんかで固まってないで中に入ったらどうです？今日は珍しく皆が揃っているんですよ」

うん、知ってる。今日、全員がここにいて分かってたし、わざわざタイミング合わせて帰ってきたんだから。ところでアル、俺の肩を掴んでるのは何故？そして力入れすぎで痛いんだけど！？

「さあ、こちらですよ」

俺の肩を離さなず力も緩めずに、フフツツと笑いながら俺を連行しようとするアルに脳内で危険信号が鳴り響く。イエロー飛び越えて最初っからレッド。つか、俺が何したんだよマジで。なんて事は思っても今のアルの前じゃ言えず、やっぱり俺の逃走を防ごうとしている様にしか思えない力で肩の掴まれたまま、俺は黙って連行されるのだった。

後ろから小さな影がこっそり付いてくるのを確認しながら……。

結論から言おう。

袋叩きに遭いました。それも仲間から。

しかも全員漏れなく魔力や気で肉体強化済みだよこんチクショー。さり気なくテオドラも参加してた辺り、怒りがどれほどの物だったかって言うのは分からないでもないが……。結局何したんだよ、俺。

それでもって現在、俺は『紅き翼』メンバー＋アルファー全員から囲まれて説教中。しかも正座。詠春は兎も角、他の奴は何で知ってるんだよ。特に旧世界出身者とお姫様共、などとうでいい事を考えていたが、勿論口を開く機会は得られず。何を考えていたあの、一体あの警備をどうやってだの、自重しろだの、もうこの三ヶ月で溜めていた鬱憤を晴らすべくと言った感じで散々言われ続けている。……そろそろ足が痛いんですが、足を崩しても

。

『却下』

あ、満場一致ですかそうですね。はい、大人しく聞いてます。大人しく聞くから、とりあえずこの『戒めの風』は解除してくれませんか、ナギ？帯状の風が体中いたる所をガツチガチに縛ってて痛いんだけど。

「そんな事言える立場かよ、お前」

そうでしたね、今の俺はそんな事言える立場じゃありませんでしたね。つうか、三ヶ月見なかっただけで凄く魔法が上達したな。まるで十年は修行してきた様な上達っぷり……………。

「リアルに魔法球の中で修行したしな、お前のお陰で」

ああ、そこら辺も勘定に入ってるんだ。納得。

「ところで、皆が怒ってるのって各国の重役暗殺してきたからって事でいいの？」

今までの総括から結論を語ってみたのだが、それを口に出した瞬間に何かが切れる様な音が聞こえた気がした。結果として、説教が一気に数時間も伸びる事に……………間違っではないはずなんだが。

結局、開放されたのは日がとつぷりと沈んだ夜の事だった。帰ってきたのが大体昼過ぎだったから……七時間程度？……
・うん、なにそれ怖い。

しかも性質タチが悪い事に途中からは全員が一遍に言っじゃなくて、一人ずつでローテンション組んで説教始めた時にはもう流石に驚くを通り越して呆れた。そこまでして説教したいのかよ。つうか、そんなに俺に不満があるのか。ちなみに、説教している奴以外は普通に休息を取っていやがった。ふざけるなど言いたい。いや、言えないんだけど。

さらにありがたい事に説教の内容が一人一人違うからもうなんとも言えないんだよ。しかも基本的に正論だし。

ローテンションになるとナギやテオドラ、アル辺りはメンバーから外れる事に。何でも、最初の説教で言いたい事は言い尽くしたてスツキリしたそう。俺はストレス発散用の何かじゃないんだけど……
・……。ああ、アルの奴は「私から言える事は何も」だと。むしろ遠くから俺を眺めてる方が楽しいのか、終始ニヤニヤしてやがった。本当に趣味が悪い……。

「あー……。くつそ。アイツラ、ボロクソ言いやがって……
」

ラカン
昔の 奴隷拳闘士の頃の体験談からの教訓？みたいな物を、詠春は……。なんだろうな、しばらく連絡を取らなかった息子を持つている親の反応？と言っか、家に帰るのが遅くなった子供を叱りつける様な反応と言っか。どっちに子供扱い自体は変わってないんだこと……。まあ詠春は前からそんな感じだったし、今更にくじら立てる程でもないからスルー。中でもアリカ姫とガトウ

の話はきつかった……。

アリカ姫のは……帝王学って言うのかね、ああ言うのも。上がいなくなれば民衆がどうなるか、とか。ガトウは俺の行動がどれだけ周囲へ影響を与えるか、みたいな感じ。勿論そこら辺について考えてなかった訳じゃないけど、正直言えば、そんな事はどうでもいい。知らない他人よりも、『紅き翼』の優先度の方が俺の中じゃずっと高いんだから……。

隠れ家の一室　俺の物として使ってる部屋のドアを開けながら、そんな事を考えていた。

自分を保ち続ける為に。

部屋に着いて顔に巻いている包帯を外した途端に、ベッドへと倒れこんだ。膝が笑ってしまっただけの事だ。聞かない中で、殺風景な部屋の唯一の調度品であるベッドまで辿り着けただけいいのかもしれない。

ベッドの上でも体が震える。手にこびり付いた、人の肉を断つ感触が消えない。死の恐怖が頭から離れない。

死を見ているが故に、何よりも死に近付いた所為で。

人の死ぬ瞬間が、人を殺す瞬間が、頭から離れない。

呼吸が浅くなっていく。俺の意思とは関係なく発動した眼が映し出す不安定で、今にも崩れ去りそうな世界。頭が痛い。心臓が張り裂けそう。

別に知らない他人を殺すのは構わない。それでどうこうなる程、俺の精神構造はまともじゃない。それぐらいは分かっている。

殺すのが辛いのは、表の顔を知ってしまったから。薄汚い裏の顔だけじゃなく、善良で善人と言われる表の顔。

自分で情報を集めて、殺す相手の事を知った。妻がいる。子供がい

る。親がいる。兄弟がいる。恋人がいる。友人がいる。中には本当のクズもいたけど、それでもやっぱり止むを得ない事情があつて協力している奴もいた。

それを、全て殺した。

『紅き翼』の敵だからと。

情け容赦なく。

老若男女お構いなしに。

殺して解^{バラ}して並べて揃えて。

まるで殺人鬼の様に

殺人貴の様に。

全てを殺し尽くした。

胃液が込み上げて来るのを、どうにか飲み込んで呼吸を整える。額に脂汗が滲む。俺の精神は、思つてた以上に脆かつたらしい。直死の魔眼を貰つて喜んでいた時が嘘の様だ。自分の馬鹿さ加減に思わず笑いが出る。

何が転生だ。浮れてて気付けなかった。そうだ、これは間違いなく戦争なんだ。人の命を奪い合う、戦争。何よりもあつけなく命が散つていく場所。そんな所に来て浮れるなんて、本当にどうかしてた。・・・・・!!

「え・・・・・?」

ベッドの上で小さくなって震える俺が感じたのは、背中に掛かつた僅かな重みと、確かな体温。ようやく思い出した、後ろから付いて来ていた小さな影の存在。

「ああ、そっか・・・お前の事、言つて忘れてたな・・・・・」

その暖かみで、少しだけ心が落ち着く。人が近くにいると言うだけで、こんなにも安心出来るって言うのは、こっちに来て初めて知った事だ。

影は後ろから俺を抱きしめる様に手を回すと、初めて口を開いた。

大丈夫、と。

「空は、一人じゃないから」

それは、俺が彼女に言った台詞で。感情の籠ってない、冷たく聞こえる声の筈なのに、すんなりと俺の中に染み込んでいく。

いつの間にか頭痛は消えていた。呼吸もいつも通り。手に残った感触が消えた訳ではないけれど。それでも、今は随分と落ち着いている。

やっぱり、俺は弱いんだろう。主人公には決してなれない。そんな強さなんて、持ち合わせてないから。だからこそ、俺は俺のやり方を貫こう。気休めだったかもしれないけど、彼女の言う通りなら、俺は一人じゃないんだから……。

「ごめん、このまま寝るから……もう少しそのままで……」

安心した途端に襲ってきた耐え難い睡魔にからそう言つと、ん、と背中越しに頷く気配を感じ取って、静かに眼を閉じる。

ああ、コイツの事、どうしようか……。アリカ姫辺り、大激怒しそうだなあ……。心地良いまどろみの中、そんな事を考えていたが、すぐに意識は深い闇の中へと落ちていく。背中に一人分の暖かさを感じながら。

彼女と最初に会ったのは、俺が『正体不明の英雄』^{アンノウン}として仕事を終えた直後だった。

月明かりしかない闇の中、血の水溜りの上に立つ俺と、それを無表情で見つめる彼女。すぐそばに倒れている首無しの死体には見向きもしないで。ただ俺を感情のない眼で見ている。

彼女の境遇を知って、俺は聞いた。「辛いのか」と。

彼女は語った。「心を空っぽにするのは得意だから」と。

俺は返した。「そりゃ羨ましい。空っぽに出来るって事は、感情をリセット出来るって事だろう？なら、好きな物を詰め込みたい放題じゃないか」と。

それ自体はただの受け売りだったんだけど、それが彼女には随分と意外な事だったらしい。少しだけ、驚いた表情をしていた。

俺は彼女に尋ねた。「その空っぽの心を埋めたくないか？」「『紅き翼』と、自分の姉と一緒にいたくないか？」と。

彼女は答えなかった。否、答えられなかった。自分の役割を熟知し、それがどれほど国にとって重要なのかを理解している彼女は、その問いには頷けない。感情と感情の板挟み。だから、俺は最後に、こう言った。

世界を、姉を助けに行かないか、と。

もう、誰も犠牲にならなくていい世界を造りに行かないか、と。

今思えば、その時の会話全てを黒歴史として封印したいぐらいだ。
どうして彼女の為にここまでやったのかはまるで分からない。何か理由があったのかもしれないし、単純な気紛れかもしれない。だが、結果として彼女は俺の手を握った。
無表情のまま。僅かな期待を、その眼に灯して。

体を揺らされる感覚に合わせて徐々に意識が浮上する。辺りはまだ暗く、部屋の中を照らすのは窓から差し込む僅かな月明かりのみ。少しずつぼやけた視界のピントが正常に戻っていく中、一番最初に目にしたのはこちらを覗き込んでいた彼女の顔だった。

「・・・・・・・・・・どうかしたか？」

「お腹^す空いた」

そう言えば最後に飯食ったのはここに帰ってくる前だっけ。そりゃ腹も減るか……。

目が部屋の暗さにも慣れてきた。昔の癖からか、時間を確認しようとしたが、俺の部屋には時計所かまともな生活用品もない事を思い出して止めた。やっぱり時計ぐらいは買っておくべきだったかもしれないと少し後悔。つつか服も着替えてなかった所為で汗臭い。元々汗臭かったのにコートも着たまま寝たから寝汗搔いてさらに酷くなってる。

「とりあえず、何か食うか……。」

その後に風呂だな。着替えは適当に詠春かアル辺りのを使わせてもらおう。下着は……新品ぐらい置いてるだろ。いざとなったら風呂に入ってる間に今着てるのを洗濯するか……。乾燥機があるかどうかは微妙だが、なかったら魔法で乾かせばいいだろ。マジで魔法便利。やっぱり、こう言うの便利な物は無駄使いするべきだ。戦争なんかに使うよりもよっぽどいい。

頭を掻きながらベッドから起き上がる。ついでに暑苦しいコートは脱いでベッドの上へシュート。いくらぞんざいに扱っても皺一つ付かない辺り、本当に便利である。

音を立てない様にゆっくりと部屋の扉を開け、シンとした廊下へ。部屋の中とは違って月明かりもない所為で真っ暗だが、この程度の闇ならもう慣れっこだ。後からちよこちよこと付いて来ている彼女の手握ってやり、彼女に合わせてゆっくりと歩く。

俺の部屋から左へ歩けばすぐに一階への階段、さらにそれを下りて行けば昼間俺がずっと説教され続けたダイニングとキッチンへ出る。あ、戸棚の中にカップ麺見つけ。ちょうど二つ。しかも醤油とんこつか。持ってきたのは詠春辺りかな？ ナイスだ、詠春。

ちなみに、最初から冷蔵庫の方はスルー。俺には料理スキルなんて物はない。一回詠春やらアルやらに教えてもらおうとしたんだが・

・うん、まあ結果は推して知るべし。

「どっちがいい？」

「両方」

「却下」

カップ麺をそれぞれ両手に持って見せると、躊躇いなく二つ共を指差すので瞬時に切って捨てる。つうか俺にも食わせる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジーツとカップ麺を睨む様に見比べている彼女を見ると、本当に人間らしくなったと実感する。最初に会った時には本当に無表情で人形みたいだったって言うのに、今じゃすっかり欲望に忠実に。俺との旅が悪かったんだろうか・・・・・・・・？

「こつち」

熟考の末にそう言って指差したのは醤油。でも仕方がないから後でとんこつも別けてやる事にしよう。

お湯をさつさと魔法で沸かして、かやくと粉末スープを入れたカップ麺にお湯を注ぐ事二分三十秒。三分ぴったりよりも三十秒ほど早めにした方が個人的には好みだ。出来ればご飯も欲しい所だが、魔法世界じゃそこまでは望めないので断念。ラーメンライスはまた今度だな。

まだ箸を使えない彼女にフォークとスプーンを渡して、二人で並んで椅子に腰掛け、ずるずると音を立てながら麺を啜る。

うん、懐かしい味だ。まだこつちに來てた三ヶ月だったって言

うのに、随分と長かった気がするのは何故だろうか。

「うまいか？」

そう聞けば、フォークを片手に四苦八苦しなからもしっかりと頷く彼女に苦笑いしつつ。頬に跳ねたスープをさつき見付けたティッシュで拭ってやる。

「ほれ」と、とんこつ味の麺を掴んだ箸を向けて、「あー」と餌を待つ雛鳥の様に大きく開かれた口の中に麺を入れてやるば、もごもごと口を動かして飲み込むと、すぐに再び自分の分へと取り掛かる所を見るに、よっぱど腹が減っていたらしい。

「あー・・・」

まあ、それはいいとしても、さっきからこっちを見てパクパクと口を開閉しているナギをどうしようか……。

「えつと……言いたい事があるなら、どうぞ」

ピシッ、と額に青筋が浮いたのは気のせいじゃなく。自分を落着ける為か、ゆっくりと一度深呼吸するナギ。そして、再びゆっくりと息を大きく吸って。

「何で姫子ちゃんがここにいるんだ――――――――――」

ナギの叫び声で俄かに『紅き翼』の隠れ家が騒がしくなり始めるのを感じ取りながら、ああ、流石に深夜の事情聴取は堪えるなあ、なんて、遠い目をしながら考えていた。つまり本日二度目の説教はいりまーす。

「おかわり」

……俺の残ってる分、食っていいから。

「ん」

「さて、色々と種明かしといこうか」

なんて格好付けてみても、昼間と変わらず板張りに正座状態なんだけど。

とは言え、ぶつちやけ特に語る事なんてないんだけどね。彼女

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア、通称『黄昏の姫御子』との出会いは既に語ったし、この三ヶ月間、今まで元老院の犬として仕事してた時に手に入れた情報で、『完全なる世界』との関わりを持っていた各国重鎮を暗殺してたのもうバレてるし……。他に何を語れと？

「いやもつとあるだろ！？『どうやってあの警備を潜り抜けたのか』とか『何故ここにアスナ姫がいるのか』とか『何故俺達がアスナ姫に今まで気付かなかったのか』とか！！」

ああ、詠春に言われて思い出した。そう言えば昼間は潜入手段につ

いては面倒だったからって言う理由で適当にはぐらかしたんだ。でも、夜中にする方がもつと面倒くせー……。やつぱり昼間にしておくべきだったかなあ、説明。

「アスナ……！！！」

で、俺が正座させられてる部屋の隅ではアリカ姫が目には涙浮かべながらアスナを抱き締め、アスナも相変わらず無表情だが、嫌がる様子も見せず。それをナギが一步離れて見守ると言う心温まる感動の再会が行われているのにも拘らず、俺は詠春、ガトウ、ゼクトさんから見下ろされながら事情聴取とか。いや、ゼクトさんは目線一緒だけでも……。勿論、アルは直接は参加せずに、こっちとあつちの両方を見ながらニヤニヤしてる。きっと内心では飯うま状態に違いない。

つつか何だこの理不尽。いや、自業自得だって言うのは分かっているんだけど、それと納得出来るかどうかって言うのはまた別物な訳だ。今この場にいないメンバーは既に寝直す為にそれぞれの部屋に戻ってしまった……。少しは俺を助けてほしい。

まあこの期に及んでしまつては仕方がない。本当に面倒臭いが、明かしてみようか。

「つつても、一つ目と二つ目はまとめて説明できるんだけど」

それもやってること自体は大して難しい事じゃない。それでも説明を渋ったのは、純粹に面倒臭かったからだ。ついでに、言葉で上手く説明出来るかも正直言えば微妙だしなー……………。

んー、と顎に手をやりながら、

「まあ、そもそも人を騙すって言うのそんなに難しい事じゃないんだよ」

と、俺はそんな言葉を皮切りに、ここにいるメンバーへと解説を始めるのだった。

俺が誰にも見付かる事なくどんな警備でも潜り抜け、アスナの存在を『紅き翼』の仲間達へと隠し果^{おお}せたその魔法の事を……。

『認識障害？』

俺は全く同じ言葉を口にして首を傾げるここにいるメンバー全員に向けて、軽く頷いてみせた。

『認識障害魔法』

それは現代を生きる西洋魔術師達にとつ

て初歩中の初歩であり、最も馴染み深い魔法でもある。

心理学での認識とは心的な過程の一つで、外界から得た情報が意味付けされた上で意識に上る事を言い、ここで言う所の外界からの情報^{情報}が知覚。これは身体からの信号である感覚をもとに構成された物だったりするのだ。

この知覚に対して意味付けを行う過程には、知性的能力　　理性、または悟性と言われる物や知識が介在し、同じ対象に対しても個人毎に同じ認識をしているとは限らず、さらにここで知覚している事は必ずしも認識している事を意味しない。所謂、「見ている」と「見えている」の違いである。

なーんて言っても、この知識全てアカシックレコードによる受け売り。しかも通常の魔法使いの使っている認識障害の種類は複数に渡り、一概には言えなかったりするんだけど、俺が愛用している認識

阻害って言うのは、相手を「見えている」の状態にする魔法であり、簡単に言えば、相手に俺の事を無意識の内に何気ない風景として認識させる事が出来る。出来るのだが……………」

「ん？でも、それって効果ないんじゃないのか？」

そう、ナギの言う通りだ。認識阻害魔法だけだと、ぶっちゃけ魔法使いは魔道に通ずるとかそんな感じの理屈で認識阻害は効き辛い上に、同じ魔法使いには結構簡単に見破られる確率が高い。当然潜入に使うのには向いていない。つうか、元々潜入の用途に使うものじゃないしな。

だからこそ、少しばかり本来の術式を弄った。具体的に言えば、俺に対する認識を阻害する術式と、別の箇所（……………）意識を誘導する（……………）術式。その二つを合わせ、新たに一つの術式と為す。

意識誘導は手品の基本だ。魔法でそれを再現するのには勿論、既存の術式に組み込むのにも大した手間は掛からなかった。

「やってる事自体は認識阻害なんかよりも尚簡単だ。ほんの少し、ほんの少しだけでいい。ただ、相手の認識に違和感を植え付けければいい。たったそれだけで、俺から意識をずらせる」

そして、意識さえずらしてしまえば、その隙を突いて認識を邪魔出来る。

本物の魔術を使った手品 そう言えば、あまりにも倒錯的だが有効なものには変わりない。認識の阻害まほうに慣れている西洋魔術師は、意識の誘導ていしなにあっさりと引っかけた ただ、それだけの事だ。

「つつても、音と音を相殺させたりだとか色々保険は掛けてたんだ

けど……まっ、以上で証明終了、Q.E.D。ついでに何か質問は？」

そう言つて、下から見上げる形で全員の顔を見渡すが……、何と言うか、全員が アルも含んだ『紅き翼』のメンバー全員が微妙な顔をしていて、

「……理解は出来ても納得出来ない、つつのが率直な感想だな。後、別に証明じゃねーだろ」

ナギが零した言葉に、全員揃つて、全く同じタイミングで深く頷くのだった。

その後は流石に遅いから解散。とは言つても、部屋に戻ろうとする俺に向けてあの場にいた、相変わらぬアルを除く全員から、

『明日も話がある』

と、しつかり釘を差され、さらに言えば三日連続正座耐久レースが決定した瞬間である。

そして、部屋に戻つて。

何故か姉であるアリカ姫ではなく俺に付いて来た上に、普通に俺が寝るベッドを陣取っているアスナに今更ながら気になった事を一つ、シャワーを浴びて濡れた髪をタオルで拭きながら尋ねてみた。

「なあ、お前、昼間は何してたんだ？」

最初の方は俺の周りをうるちよろしてたんだが、先に説明した認識阻害の効果で誰にも気付かれず暇だったのか、その内どこかに行つてしまっていたのを今更ながらに思い出したのだ。そして、その問いに対するアスナの答えは、

「探検」

と、実に簡潔な一言だったとさ。

ところでさ、お前この部屋で寝るの？

「ん」

俺に軽く顎を引いて頷いて見せるアスナを前に、アリカ姫やアル辺りの対策に認識阻害掛け直しておこうか、とかも考えたが、まあ、よくよく考えればアスナが俺の部屋に付いて来たのを知ってるんだから対策もクソもないじゃんって事に気付いたのは次の日、それも昼前に目を覚ました後の事でだったりする。

ちなみに、完全な余談ではあるが、俺は最初は床で寝るつもりだったにも関わらず、結局数時間前と同じ様に一つのベッドで寝る事になっていたり。……無邪気って言うのは何よりも恐ろしいと、身に染みて実感した時である。

案外俺を気遣ってかも、なんて考えてもみたが、それが本当かどうかは……。アスナ本人しか知る余地はない事である、と。

三ヶ月ぶりの帰還だそうだ（後書き）

えー、大変遅くなった上に結構量が少ないです。すいません。

今までとはちよいと違うテイストになれば、と。まあ別に話しその物が暗くなる訳ではありませんので、そう言った事を危惧していた方はご安心を。と言うか、作者自身シリアル（笑）しか書ける自信がありませんのでwww

影については・・・まあ皆さん分かりますよね。分からなかった人に言っておきますが、オリキャラではないです、はい。フラグでもないですよ？・・・すいません、嘘です。

空君の豹変にもちゃんと理由もありますのでwwwとりあえず実際に一般人の反応ってこんな感じだと思ってますwww

あー、徐々に原作乖離を始めたなー。皆大好き（笑）なネギ君は一体どうなるんだろうなー。あ、ちなみに作者はそこまでネギの事嫌いじゃありません。と言うか漫画読む時にあんまり物考えてませんwww

感想・質問・アドバイスなどありましたらどんどんどうぞ。あ、先の展開が読めてもネタバレやネタ潰しは勘弁してくださいwwwではまた次回ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1777n/>

ネギまの世界にチートが出現！？

2011年10月1日02時34分発行